

目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注 （上）：十月十六日～二十七日

静永，健
九州大学大学院人文科学研究院：教授

稲森，雅子
九州大学大学院人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/7178806>

出版情報：文学研究. 121, pp.1-48, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注（上）

——十月十六日～二十七日

静 永 健
稲 森 雅 子

はじめに

目加田誠『北京旅行日記（一九四二年）』は、目加田誠博士（一九〇四～一九四、以下敬称略）が、中国中北部を訪れた際の記録、大学ノート二冊¹で、福岡県の大野城心のふるさと館に所蔵されている。ノートの表紙には、「支那旅行日記誌／昭和十七年秋／中支／目加田誠」（第一冊）、「支那旅行日記誌／北支／昭和十七年十一月」（第二冊）と万年筆による丁寧な楷書の文字がある。目加田家のご遺族及び同館のご好意により、一九三六年の旅行日記に続き、翻字のうえ公開するものである。あらためてここに深謝いたします。

目加田誠は、この年十月十六日に福岡から空路上海へ向かう。その後、蘇州、南京、九江、廬山、漢口、武昌、岳州を巡り、再び北京を訪ね、釜山、下関を経由して十一月二十九日に福岡へ帰着した。本稿は、行程の前半、漢口到着まで出発より十月二十七日までの記録である。上海では内山完造、陶晶孫らと交流する。蘇州では即席の座

談会に招かれ、南京より長江を遡上して九江に向かい、駐留中の弟と再会を果たす。

各地で厳しい状況を見聞したためか、言葉を慎重に選びながら綴ったとみられ、随所に推敲の痕が残る。加えて、後日見直した際のものと思しき朱墨訂正もある。これらの修正について、注を付した。先頃、早稲田大学小川利康教授より、同大学會津八一記念博物館松枝茂夫文庫に当該旅行中に筆者が松枝茂夫へ送ったと思しき葉書があるとの情報を書影とともにいただいた。確認できた葉書二通について、当該日に注を付し、概要を記した。同文庫の目加田誠書簡については、今後調査のうえ、あらためて報告することとしたい。^②

この旅行について言及する主な随筆は以下のとおり。

- ・「論文集のあとに」（『中国文学論考』目加田誠著作集第四卷、龍溪書舎、一九八五年）五二二―五二三頁
 - ・「中国今昔 廬山」（『随想 秋から冬へ』（龍溪書舎、一九七九年）一〇四―一〇六頁
 - ・「わが半生（九）」（『夕陽限りなく好し』第四章「夕陽限り無く好し」、時事通信社、一九八六年）二六二頁
- 本稿は、福岡出版から九江到着までの記録である。

【凡例】

・体例は、拙稿「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）」（『中国文学論集』第四九号、九州大学中国文学会、二〇二〇年十二月、一八〇―二〇六頁）、「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』（二）」（『文学研究』第百十九輯、一一九―一四三頁）、「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注」（終）」（『文学研究』第百二十輯、一―五六頁）に従う。本文に付す傍点及び傍線は、朱墨により付されたもの。

・九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」―一九三〇年代北京の学術交流』（中国書店、二〇一九年）及び上記拙稿に注釈がある場合は、「『北平日記』●頁注●」、「北京旅行日記（一九三六年）」（●）●頁注●」と表

記した。

・文献については、主として近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書店、一九七八年）、尾崎雄二郎・竺沙雅章・戸川芳郎「編集代表」『中国文化史大事典』（大修館書店、二〇一三年）を参照した。人物については、主として中村義ほか『近代日中関係史人名辞典』（東京堂出版、二〇一〇年）、一般的事項については、ウェブサイト「Japan Knowledge Lib（ジャパンナレッジ）」（URL = japanknowledge.com）及び「百度百科」（URL = <https://baike.baidu.com/>）上海については、木之内誠『上海歴史ガイドマップ（増補改訂版）』（大修館書店、二〇一一年）などを参照した。

・目加田誠が旅行中に入手した資料が大野城心のふるさと館、九州大学附属図書館に現存する場合は、注釈内にその旨を記す。

・中華民国通貨を「圓（法幣）」、日本通貨を「円」と書き分けていると思われるため、そのまま表記した。

【第一冊】支那旅行日誌 昭和十七年秋 中支

十月十六日

晩方雨ふる。やがて止む。未明より起きてさわぎ、家族一同と共に雁の巣に向ふ。

飛行場^③には、楠本 松枝 瀬利 松本 渡辺 森^④の諸君見送り。

此度は、始め北支からまわるつもりであつたが、急に上海を先にすることになり、豊島氏いろ／＼と尽力し、幸に飛行機の切符を買った。出発前の忙しさかぎりなし。

（欄外注） 福岡 上海間 航空券 一三五円^⑤

九時半飛行機柏号に搭乗す。二十一人乗りダグラス機^⑥。爆音と共に動き出す。融、敬子その他の手をふつて送る^⑦。

機は一旦方向をかへ、更に爆音をとどろかして滑走し、いつの間にか地を離れて、すぐに海の上に出た。残ノ島^⑩の沖合を飛ぶ。十分間にして唐津の沖をすぎる。

雲低く、霧まよひ、機は極めて低く飛ぶ。海上は墨のやうなさびなみを立て、静謐で機は殆ど揺れない。

雲ますく濃く、機は海面にすれくにとぶ。島影も見えなくなるころ、や、動揺を感じたが、時に又雲切れて陽が窓に当り、海面がきらくときらめく。

爆音と、軽い振動のせいでたまらず眠気を覚える。思はずうとくする。

十一時半頃、座席に配つてある弁当をたべる。海の色が黄色くなつた。一しきり霧がまよふと思ふ間にもう海をこえて緑の陸地だ。泥の海面と殆ど高さの違はぬ湿地だ。どれが楊子江^{アマ}だか黄浦江だかわからない中に地面が斜めになつたと思ふと、機は幾度も旋回して、静かに着陸。大場鎮飛行場^⑬。雁の巢を出て、こゝまで三時間足らずである。

さてこゝに我乍ら呆れた失策をした。

着陸してすぐ安着の電報を打たうとして頼信紙に認め、金を払ふとしてポケットを見るとこれがない。住友の信用状^⑮と共に、先刻換へた軍票も一緒に入れたサックがないのだ。

洋服、外套、どのポケットを見てもない。途方もない失敗だ。雁の巢で証明書を見せるときそのまゝ置き忘れたのだらう。

すぐ飛行場の人に頼んで雁の巢に電報して貰ふ。

とに角仕様がなない。バスにのつて航空会社営業所までゆく。

女事務員は大いに同情して、金を立て替へ車を雇つてくれたので、それにのつて、北四川路の内山書店にゆく^⑳。途に見るに上海の町は何と物資の多いことだらう。

林檎、野菜、パン、菓子、何でも積まれてゐる。

久しぶりに見る支那の町だ。何だか嬉しい。

雨が少々ふつて来た。

内山に来てみるとけふは休み。今度は歩いて祥徳路緑苑荘の小野君を訪問⁽²⁴⁾。小野君は近く大連に転任、それに満鉄の中に何かゴタ⁽²⁵⁾があつたとてあわただしい最中⁽²⁶⁾。

小憩の後小野君と共に内山氏の自宅を訪れて、信用状及金の紛失を語る。

内山氏の親切により今日は内山氏宅に泊る事になり、小野君は出かける⁽²⁸⁾。

内山氏からいろいろと上海の話をきいた⁽²⁹⁾。夕方まで話をきき、二階で夕食。

内山氏は座談会に出席、奥さんと話す。小野君一寸来て今夜は自警団とて帰る。やがて内山氏帰宅、再び話して、三階の室にはいる。

この家は一階応接間、二階居間、三階の小室が書斎になりこゝのべつドに泊る。

ねやうとしてトランクをあけると、何とした事だ。信用状のサツクはちゃんとその中にあるではないか。軍票もそのまゝに。雁の巢の税関で、うつかり之をトランクの中に入れて了つたのだ。

この半日の心配をかへりみて腹が立つやらをかしいやら情なくなる。

そのため無事着いた事も知らせず、家では案じてゐるであらうに。

十七日

晴 爽やかな朝だ。

朝食にパン、バタ、紅茶、卵、林檎⁽³¹⁾すべて今日日本内地では得がたいものばかり。

午前中小野君を訪ね、散歩に出る。

先づ航空会社に昨日の礼にゆき、郵便局で家に電報し、それからバンドを歩く。南京路に出て、洋書店そのほかを見て、広西路の来薰閣⁽³²⁾に寄る。

南京路にて昼食。麵、饅頭など。

帰途、小野君に分れ憲兵隊⁽³³⁾によつてみたが副官は留守にて逢へず。

絵ハガキを買ひ内山宅に戻つて書き、再び町に出て投函⁽³⁵⁾す。

海軍陸戦隊⁽³⁶⁾によつて、岸さんの紹介の藤田工作部長の所在をきいたが、とほく南方にあつて一寸ゆかれず。陸戦隊の兵士の強さうなこと。

内山書店にゆき主人と語るうち小野君来る。

陶晶孫⁽³⁷⁾ともこゝで待ち合せ、今夜の宴会新雅⁽³⁸⁾にゆく。今夜は小野君が、査、范といふ二文学青年を陶氏に紹介するといふ会に飛び入りしたまで。内山主人も一緒。

文学、翻訳などについて語る。陶氏は医者、四十才余り、落ち着いた人、静かに物を見て書く人だらう。二青年は何れも弱い。査君は漱石など訳した由、しかしこの人々から大した事はもとより期待出来まい。今中国の青年にはもつとく必死になつて生きぬく氣迫がほしいのだ。

内山に帰る。十二時半まで主人と語る。内山に泊る。

十八日(日)

朝、憲兵隊にゆきしもやはり不在。

新亜細亜ホテル⁽³⁹⁾に宿をきめて、小野君を訪ねてその事を云ひ、内山にて荷物をとつてホテルに投宿。恐ろしく大

さい宿で、自分の泊るのは一番小さい部屋。一泊八円五十銭。しかし仲々いい、ホテルだ。

午食は森永にてランチ、一圓七十銭。

菓子を買ふて帰る。

一時半頃小野君来る。一緒に河南路の中華書局、掃葉山房、商務印書館⁽¹¹⁾を歩いたが日曜で休み。

百新書店で巴金の『家』、『春』、『秋』三部作を買ふて家に送らす。その価三十八元（日本軍票の一圓は儲備銀行の五元五角に当る）。

それから、更に町を歩き、電車で大世界の前に出、バスにのる。金都映画館⁽¹²⁾で夕方の切符を買ひ、仏租界を歩く。このあたり支那人町は日本人の姿も見えず、たゞ支那人、支那人、⁽¹³⁾が雑沓してゐる。

日本の現状の苦しみと対照して何と不思議な世界だらう。上海の広さはをどろくべし。地域人口は東京に及ばぬが、東京は今や隅から隅まで一色であるのに、この上海の町は何と複雑なことだらう。

日本人が多く来てゐるといふのも虹口、北四川路一帯だ。上海の町そのものからいへばほんの一部にすぎまい。そゞろ歩く外人の中敵性国家人は腕に赤い腕章をつけてゐる。⁽¹⁴⁾歩いてゐる外人は一樣に柄がわるい。往々外人の乞食を見る。

仏租界の何とかいふ喫茶店でコーヒーをのむ。

来てゐるのは正に⁽¹⁵⁾各人だ。満鉄の松井、水野⁽¹⁶⁾といふ人を紹介さる。

夕方五時半から、金都映画館で映画「秋」を見る。巴金の作の映画化。兄弟によつて時代を現し、之まで見た支那映画では一番感心した。之なら日本にもつて行つても恥しくあるまい。

虹口に来てビールをのみ食事をしてホテルにかへる。

夜の上海は灯火管制のため幾分暗く、月が高楼の上に出てゐる。

雑誌、小説月報、万象、古今、といふ四種の雑誌を映画館の前で買った。

予且、丁寧などといふ人が多く書いてゐる。

予且のものの三篇読む。日本の婦人雑誌の連続物程度だらう。女学生に取材したものそのうち二つ。

十九日

ホテルにて日本の朝食。

憲兵隊にゆき副官にあつてきくと九江の憲兵隊から打ち合せの電報が来てゐた。修は九江にゐるらしい。それによつて今後の予定を作らう。

住友に行つて信用状の金を五百五十圓引き出す。二時間も待たされた。

正金まで歩き、小野君を訪ねる。小野君は満鉄の調査員で、事務所は正金の四階にある。

一緒に外人の店で食事し、洋書やで『西廂記』の英訳を買ひ、バスにのり自然科学研究所にゆき陶氏にあふ。

それから同文書院（元の交通大学、今憲兵隊と同居）に行つて、小竹文夫氏を訪問。『中国版画史図録』の購入を序でにたのんだ。支那語の授業を參觀出来なかつた事は残念。

競馬場の前の大きなホテルでお茶をのみ、それから大三星といふ菜館で陶氏の招待による宴会にゆく。同席は先般の潘君、査君、内山氏、山室女史、張君、西村君、小玉君、それに小野君と僕。

之は余り話し度いことも話せず話し度い事もなく、只料理は珍しかつた。煨鶏（泥に蔵した鶏の料理）そのほか常熟料理。

ホテルに小野君と西村君と一緒にかへり十一時すぎまで話す。

そのときいた話、

杭州の『四庫全書』は蒋介石の方に持ち去られたこと。浙江図書館のものは一部接收のこと。⁽⁷⁸⁾ 南京の国家図書館のものも善本は持ち去られたこと。⁽⁸⁰⁾ (朱字) 間チガヒ⁽⁸¹⁾ 嘉業堂のものは散佚したこと。⁽⁸²⁾

章太炎たちの国学研究会はその後上海に引こしてゐたこと。⁽⁸³⁾

上海の街の底の深さは到底わからない。

弄洞⁽⁸⁴⁾(?)とかいふ町の露路をはさんだ三階建の中の生活は思つてみても恐ろしい。都会の悲惨だ。都市といふもの、発達の極が之であらうか。それに比して町を歩く支那の女の贅沢さは又どうだ。之もこの都会の生んだ変態でなくて何であらう。何にしても印象が余り強く多く、自分にはとてもまだまとまつた考をもち得ない。一日この町をはなれて静かにねて考へてみたい、かも知れない。

人間の多いことも恐ろしいばかりだ。⁽⁸⁶⁾ 只もう人の氾濫だ。そこには大東亜戦争も何事もない、只々人のうごめきだ。

二十日

朝のうち家へ送る土産物を買ふ。

日毛糸 三十五圓(半ポンドづゝ送る由)

敷布 十一円余

湯上りタオル二つ 九円二十銭

右送料、工部局税金、併せて六十圓、馬鹿々々しい値段だが。

満鉄にゆき、小野君と一緒に、市政研究会とかいふところに行つて、恰度来合せてゐた山岸女史にあふ。氏はこの市外で社会事業をやつてゐるひと。⁽⁸⁸⁾

四川路の近代科学図書館を訪ふ。図書館はなんだか生彩なし。

蔣松輝君⁽⁹¹⁾といふ人に紹介され、小野君と三人本屋をみる。

中華書局で四部備要合訂本『二十四史』の(完成せず)八冊まで買ふ。⁽⁹³⁾送料共で八十八圓余、(あと十冊あり。送料共恰度百圓になる由。)

商務印書館その他を見るが本は少い。

開明⁽⁹⁴⁾で劉復の雜文を買ふ。⁽⁹⁵⁾

京華といふ新式の料理で点心を食べる。⁽⁹⁶⁾

小野君と分れて来薰閣にゆき、今日は幸ひ陳杭が家にゐて、府県志購入の相談をする。⁽⁹⁷⁾

久しぶりに北京語を使ふ事が出来て嬉しかりき。

先施公司⁽⁹⁸⁾で自分用の湯上タオルを買ふと一圓五十錢^{マツ}(日本の金で)。

けさ送らせた神戸商会⁽⁹⁹⁾の三分の一の値段也だ。

そこから電車でホテルにかへる。

ホテルにて湯に入る。

小野君の家に行つて夕食。陶晶孫氏に挨拶の訪問にゆきし所、恰度自警団にて表に立つてあるところで月を眺め乍ら暫く話して別れる。⁽¹⁰⁰⁾

内山にも挨拶にゆく。

十時すぎホテルにかへる。明日は蘇州に行く予定。

十月二十一日

午前十時二十五分の汽車で蘇州にゆくつもりで小野君と駅に行つたが、之は三等車ばかりでひどい汽車らしいので、十二時の列車にかへる^(註)。

崑山をすぎて二時すぎ蘇州につく。すぐ皇后飯店に宿をきめたが恐ろしくひどい部屋だ^(註)。とても今夜は眠れまい。近くの百貨公司（大丸）の四階の放送局に岩井氏を訪ね（蘇州中国放送協会、岩井隆一）、台長周卓人にあふ^(註)。明日蘇州の文芸家を集めて座談会を催したき由。

中日文化協会につとめる日本語の出来る若い者を案内に於て貰ひ旧書店を見る。別にほしいものもなし。觀前街を歩き、俤で獅子林にゆく。俗極まる。興味なし。

又觀前街にかへつて、その男と一緒に晩食を食ふ。こゝは今蟹の時期だ^(註)。

夜は所在なく宿に歸つたがさてもうにもならぬ。あたりはやかましい。電灯は暗い。こんな事なら早く南京に行つて了ひ度い。それとも二十四の船の切符を買つて、それまで上海にゐれば良かった。

隣りの部屋で胡弓がなつて、誰か老生をうたひ、つゞいて浄の大声になつた。向ひの部屋では麻雀だ。この騒々しさも支那宿の風景か。ボーイが女をつれて来る。やつと追ひ返す。ねむいけれどやかましくてねむれず、起きてタバコを吸ひ、さめた茶をのみ、床に入り、又起きてタバコを吸ふ。

明日の晩はもう南京に行つて泊らうか。

上海がなつかしい。

二十二日

昨夜はやかましかつたが疲れてゐると見えていつかねむつた。七時すぎ目がさめる。觀前街でコーヒーとパンを

食べさす家を見付けて朝食をすませ、少し散歩し、百貨公司以南京までの切符（急行券共二等で十七圓余）を買ふ。子供の長靴が目だったので融のために買つて送る。十三圓余。放送局に行つてみたが岩井氏は来てをらず、ひとり外に出て骨董屋など見てゐたが、仕様がないので俵を雇つて滄浪亭⁽¹²⁾に行つてみた。滄浪亭は秋風に落莫たるありさまで人影もない。ずん／＼奥の方に入つてゆくと、その一室に国学社の看板がかけてあり、唯一人が座つてゐたので刺を通じ、国学社発行の『江蘇文獻』合訂本を貰ふ。⁽¹³⁾こ、は今この『江蘇文獻』の発行と、別に月課を予め題を出して文を作らせる事をしてゐる由。

園内を歩いてまわると只落葉の音ばかり。うらぶれた景色が一種の情趣を起させる。⁽¹⁴⁾図書館は滄浪亭の前にある。放送局に再び来てみると岩井といふ人はやはり来てゐないが周台長がやつて来て、図書館長の徐徴氏⁽¹⁵⁾を呼び、一緒に昼飯をたべにゆく。昨日食べた店の前の家、蟹料理とか魚の肺だとか。

三人で話して面白かつた。蘇州に於ける文学者の生活の方法のなさが何よりも話題になつた。

陳奐⁽¹⁶⁾の事が話に出て、徐徴氏はその血つゞきだといつてゐた。章太炎の事も話に出る。段玉裁⁽¹⁷⁾の晩年住んでゐたところはよくわからぬ由。料理やを出て、あまりとほくないところにある兪曲園⁽¹⁸⁾の春在堂⁽¹⁹⁾を見る。恐ろしく立派な大きな構へだが今は可成り荒れてゐる。

子孫がこちらにゐないからだらう。

惠棟⁽²⁰⁾の子孫の恵心可といふ者は省政府の何かの役についてゐるらしい。陳奐の直系の子孫はないらしく、その傍系⁽²¹⁾のものは非常に貧乏してゐるとのこと。

それから留園⁽²²⁾にゆく。七年前に來た時に比べて何と荒れはてたことだらう。⁽²³⁾あの時の感じとはまるでちがつて了つた。それにあの時は春だつたから柳の芽が美しく遊人も少なからず、冠雲台⁽²⁴⁾で茶を飲んだりしたものだが、今は人影もなく、茶をのませるところもない。⁽²⁵⁾只秋風落漠として、木樨の香りが廻廊にみちる。

留園⁽¹³⁾を出て西園⁽¹⁴⁾に一寸ゆき、もう疲れてゐるからそこで俵を雇つて貰つて一旦宿にかへる。

けふは昨日⁽¹²⁾とちがつて蘇州のよさを味つた。

風は少し寒い。

夜、百貨店の二階で中日文化協会主催で座談会を開きつゝいて宴会。

教育庁長袁殊⁽¹⁵⁾、同秘書、中日文化協合理事で作家の丁々⁽¹⁶⁾、其他建設庁とか何とかの役人や新聞記者たち約二十名。御馳走はうまかつたが大した収穫もなし。

要するに蘇州には新作家はをらず、旧学者⁽¹⁵⁾の活発なる運動もなく、只僅かに二三の静かな学者が蘇州の掌故などを調べてゐるのであらう。

今夜又皇后飯店の昨夜の部屋にとまる。

やかましくてならない。

蘇州の印象は上海とは全くちがつたものだ。古い静かな田舎である⁽¹⁵⁾（人口は約三十万、少しそれに近頃増加してゐる由）。こゝに多くの文人学者が華やかに活躍した往時をなつかしく偲ぶばかりだ。

二十三日

昨夜はやかましくて三時すぎまでねむれなかつた。三時になつて喧騒は幾分静まつたが、どこかの部屋の麻雀は尚つゝいてゐた。

こうして明方近くまでさわぎ散らして、いつになつたら彼らは寝るのだらう。根比べのつもりで雑誌をよんでゐたが、いつの間にか眠つてゐた。何といふ不健全な彼らの生活であらう。客のねてゐる部屋の前で走りふざけ奇声を發して、少しも人の感情を顧みぬ。習慣とはいへ下等な話だ。之があゝの慇懃礼節をつくす中国の人々と同じ

人種なのであらうか。

支那宿に泊つたのも、亦い、経験であつた。

朝七時半に目がさめる。すぐ顔を洗ひ仕度をして勘定を払ふ。二泊十五元、チップに六元をいた。ボーイがよほど不平らしい（日本金になほして二泊心付け共で約四円）。⁽¹³⁾ 之では部屋が悪いのも無理はあるまい。放送局の前に行つてみたがまだ入口がしまつてゐる。

周台長に挨拶したかつたが逢へないのは残念。

観前街のきのうの店で牛乳とパン。

俤にのつて駅に向ふ。風が稍つめたい。

街上馬桶をあらふもの多く、サツサツといふ音が方々できこえる。

北寺の塔は昔のぼつたが、今度は只駅の往復にその下を通つたゞけ。その昔塔の上から見た美しい町の屋根を想ひ起す。

俤は平門を出て橋を渡る。城壁のまわりを水がめぐつてゐる。水は可成り美しい。城門のところでは一旦俤を降り、中国人は荷物と身体の検査をして橋をわたる。我々は只憲兵に帽子をとつて歩いてすぎる。

駅についたら、まだ一時間あつた。駅上の食堂で珈琲をのみ、このノートを誌す。⁽¹⁴⁾

十時二十五分の汽車で南京に向ふ。⁽¹⁵⁾

無錫、常州、丹陽をすぎる間、⁽¹⁶⁾ 実に広い平野だ。

鎮江では甘露寺、金山寺が見えて、旧遊を想ひ起す。⁽¹⁷⁾

蘇州の駅で買った『江蘇日報』に昨夜の中日文化協会の記事が大々的に出て、私の挨拶もほどよくまとめて掲げられてゐる。⁽¹⁸⁾

柴金山が見えてやがて南京につく。南京では大変検査がきびしいとか聞いたが何事も無い。一寸会釈して通るだけで済む。

駅からバスで市内に向ふ（首都飯店のバスが迎へに来てゐるときいていたのに来てゐないので）。

ロータリーで降りてツーリストにゆき、更に中山東路の上海旅行案内所支店⁽¹⁸⁾で九江まで二等の船の切符（二十九円）を買ふ。幸ひ一枚不要で返して来た人があつたので買へた。

そこから宝来館⁽¹⁹⁾に行く。静かな部屋を求めて泊る。割合に気持のよさ、うな宿だ。

浴場はまだ誰も入つてゐないきれいな湯でなみ／＼とあり、蘇州の支那宿の垢を落してさっぱりする。

駅からはいつてここまで来た所だけを見ると南京は一体何といふ町だらう。町幅は漠然と広く、家並は安ブシンでそれに日本名の店が多く並び、兵隊さんで充満してゐる。日本の女も多く歩いてゐる。

七年前に見た南京とは可成りちがつた気持ちだ。

夜、宿を出て俵を雇ひ太平路を下つて夫子廟⁽²⁰⁾に行く。

流石このあたりは支那の都の歓楽郷だ。秦淮⁽²¹⁾一带にかけてをびただしい料理屋の並び⁽²²⁾、盛んな人々の往来、耀光きらめく中を漫步して秦淮のほとりに佇む。画舫⁽²³⁾は廃止されたか水の上は暗かつた。

帰途は太平路を歩いて書店を見る。十数軒あるが保文堂、翰文書店などが大きく面白いものも少くない。『文心雕龍⁽²⁴⁾』の乾隆版、『紅樓夢』王希廉評本の初めのものなど何れも端本である。

ことに『紅樓夢』は惜しいことに五冊しかない。

夜は可成り寒い。

宿の部屋は静かであるが足が冷えてしばらくは眠れなかつた。

二十四日

朝の中、秣陵村の同仁病院検疫所⁽¹⁶⁾にゆき検便をたのむ。

報道部にゆき岩崎大佐にあひ、報道部の人々にあふ⁽¹⁷⁾。

現在支那側の文学者は別に誰も南京にはゐないらしい。

代表的な人として張資平⁽¹⁸⁾、陳大悲⁽¹⁹⁾（劇作、演出⁽²⁰⁾）があるといはれるが、こんなつまらぬ人々に逢ひ度くもない。

そのほか学者として、陳寥士⁽²¹⁾といふ人（行政院⁽²²⁾）などあるときいたが別に尋ねてもみず。

樊仲雲⁽²³⁾（中大学長⁽²⁴⁾）は可成りしつかりしてゐる由。

大学は金陵大学のあとに中央大学⁽²⁵⁾といふものが出来てゐるが学者もまだ集まらぬ由。要するにこの方面は何にもないのだらう。

大使館に麓君⁽²⁶⁾をたづね、昼飯を福昌飯店⁽²⁷⁾でたべる。

麓君はえらい権幕だ。こういう人も亦現在必要であらう。

接収図書などを大いにあつめて、大研究所を作つたら良からうと話した。

それにしても支那の古典研究は今後どういふ風にすゝむであらう。麓君はやがてこの時期がすぎれば又元のやうに支那人⁽²⁸⁾らしく同じ学問がつけたれるだらうといふ。それも一理ある。が果してさうであらうか⁽²⁹⁾。

支那の文学史は古来かういふ時期を度々くりかへして来てゐる。明末を見よ。元末を見よ。否—もつと古い六朝を見よ。支那人の複雑性はそうした時さまぐの形であらはれる。いやあらはれないものも多いことだ。今その例をこゝに見るのだ。それを繰り返しく、支那人の文学を愛する心持ちは二千年来⁽³⁰⁾ひたすらそれにとりつかれて来た。が今後の支那は？ 私には全く予想出来ない。清初の顧炎武、黄宗羲⁽³¹⁾がちがつた衣裳をつけて現はれる日があるのではあるまいか。もとよりその時は漢学といふやうなよそほひはふりすてゝゐるのではないか。このや

つきとなつてゐる日本の予想の外に支那の強い精神はのびてゆくのではあるまいか。

麓君と別れて、珠江路の図書館にゆく（北京から移した地質研究所のあと）。こゝは接収圖書をあつめて整理し（未完）先頃支那側に返したものだ。⁽¹⁵⁾中西の圖書を多くあつめてゐる。

中でも善本としては先に国学図書館にあつた丁氏八千卷楼で、朝天宮に収蔵してあつたものを皆こゝにもつて来た。最もすぐれは宋元本は却つて朝天宮にあつたがために無事にこゝに収められたらしい。八千卷楼のものは多少散佚もあるが、そうした訳で最善本は却つて残つたといふ。

しかしこゝも整理がまだ完らず（檔案など沢山ある）。

重複のものも多いといふ。その重複のもの、分譲を約束したいと思ふ（九大から公文書を以てする必要あり）。ついで俵をやとひ、鶏鳴寺の麓、国民政府の左隣の博物館を見る。

こゝは以前研究院のあつたところ（以前趙元任をたづねたことを想ひ出す⁽¹⁶⁾）。

こゝは以前の歴史研究所のもの、又北京から南遷した宝物の一部（大部分は行方しれず）ををさめて陳列する⁽¹⁸⁾。明清の瓷器の美しさ、玉器（玉璽——広運之印その他）の見事さ、土器、陵誌銘の数々。

ことに瓷器のすばらしさに驚ろいた。銅器はごく少ない。あの北京の銅器の大部分は行方しれぬ。

それからうしろの鶏鳴寺にのぼる。以前見落としたところだ。之は明代の建造。

山の上から玄武湖を見降すのは悪くない景色だ。台城と思はれるあたり秋草が半ば枯れてゐる。

凡そ南京城の雄大さは北京にまさる。城内繁華な市街は中華門に近い一帯だけ。あとは小丘あり、畑あり、空地あり。その間を中山路が一直線に走る。

南京の印象はやや漠然としてゐる。

上海で派手なネクタイの作家の卵にあひ、蘇州で支那服の掌故学者にあひ、南京で威勢のいい麓君たちにあふ。

三つの都会の性格がこゝによく代表されてゐる。きのふもけふも宿で湯に入り、夕食をすませる。ビールをのんだせいか眠くなつて早くねる。麓君が来てくれたさうだが少しも知らず。十時すぎて目がさめる。あれこれと考へて暫くねむれず。外は月の光。⁽¹⁸⁾

二十五日

朝、本屋で『阿Q正伝』の劇本と、中南支の地図を買ふ。

タバコは可成り高い。「前門」二十本入六十銭（十本入りを支那人の店で買つたら二元六角だつた。之は高い。）スリーキヤツスルが七十銭（十本入）。⁽¹⁹⁾

同仁医院検疫所に検便証書をとりにゆく。

十一時宿を出て町で食事し、新街口からバスで南京駅にゆき、俵をやとつて十三碼頭の船にゆく。⁽²⁰⁾

一時乗船、荷役に時間がとれ、五時半漸く出航。⁽²¹⁾

滔々とも何とも形容しがたい長江の流れ。江上から眺める紫金山の美しさ、繊鋭なその山の線。⁽²²⁾

江を控へ、丘をめぐらせた南京城が天下の要害たる所が充分察せられる。

船は北岸近くすゝむ。減水期ときいたが、まだそれほどではない。岸に芦荻花さき楊柳の蔭に民家がある。

夕陽が江上に流れて風はやゝ寒い。

十時半蕪湖につき（恰度瀬戸内海の港に似たと同じ気持ち）今夜は蕪湖に停泊。⁽²³⁾

二十六日

六時頃蕪湖を出帆したらしい。七時起床。快晴。⁽²⁴⁾船のすゝむ左の方に太陽がのぼり西の方には月が残つてゐる。⁽²⁵⁾

江上に霧まよひ、鳬鷺⁽⁹⁾が無数に空をとんでゐる。岸には楊柳が生い茂つてゐる。時々江上を帆船が流れてゆく。船の前方を眺めれば、たゞ⁽²⁰⁾森々森々としてはてしもない。船は退屈だ。どこまで行つても同じやうな長江の流れだ。

減水期に入りつゝ、あるため兩岸がやゝ高くなつてゐる。

楊柳の茂る右岸に民家が並び時々帆をはつた舟がすぎる。

江が大曲りにまがつて遠く塔が見え出して一時間あまり、午後四時半安慶⁽²¹⁾につく。

塔は江辺にあつて夕陽を浴びて美しい。

古めかしい城壁があり、城内の丘の麓が見える。

船客はすべて上陸を許さぬ⁽²²⁾。

安慶でだいぶ客が降りた、といつても僅かの人で時たましか無い船として、荷物も客も非常に淋しい。人口は約十萬、日本人は七八百（城内六百）とか。

一時間ほどですぐ出航する。とほざかりゆく安慶の町は、稍小高い丘になつて美しかった。

七時すぎ、夕暮れの色濃くなる頃、船は江の中流に碇を投げて停つた。夜間航行が出来ないので今夜はこゝに泊る。赤い月が右岸の方に低い⁽²³⁾。

二十七日

朝七時、抜錨。けふもよく晴れた天気だ。⁽²⁴⁾

船のすゝむ右の方は山々が連る。江の北には山の影もなく一面の平野らしい。それに湖沢が多いのだ。⁽²⁵⁾右岸には時折山が江に迫つてゐるところもある。

十一時近く右岸に山迫り、白壁の寺あり。左岸に突として、一小山のキツ立し、その上に塔あり、丘腹に又寺がある。鴟がとびかふてこのあたりの風景は仲々いい。

(欄外注) 小姑山⁽²³⁾

十一時、彭沢をすぎる。彭沢は江にのぞみ、三方山にかこまれた小邑だ。ぐるりの山の峯へかけて城壁が築かれ邑中に何か一つ大きな樓の屋根が見える。岸には多少船がついてゐる。

十二時、雲際にとほく廬山を見る。

十二時五十分、湖口を通る。廬山はその全貌を現す(湖口は鄱陽湖の入口である)。

二時頃、九江へ着く。着いた碼頭で荷上げをし、ランチにのつて川下の棧橋に上る。荷物の検査、領事館の旅行証明書検閲。

棧橋から憲兵隊本部を訪ねてゆく。長江に面した一帯は凡て租界の洋建築で整頓してゐる。アカシヤが非常に静かな町だ。

憲兵隊にゆき修に電話をかけて貰ふ。修は碼頭に出迎へに行つて行き違いになつた。

間もなく修がやつて来る。非常に元気で体格も立派になり、亡くなつた我々の父親そのまま。一寸息をのむ心持。修と自動車にのり、修の家にゆく。修は堀山隊(貨物廠九江支廠)の獣医資材課長で、一軒いゝ家を当てがはれてゐる。もと英米権益の中学校の先生のゐた家とかで可成り広く、立派な家に一人ボーイを使つてゐる。いゝ生活なので之にも驚いた。うしろの方は乳牛が二十頭ばかり居り、少し畑も作つてゐる。

先づこゝに落付く事にして湯に入り、すきやきを食べる。屠牛場も別にあるとかで上等のすきやきに日本酒は結構だ。

修にいろいろ戦場の話をき、又日本内地の留守の間の様子を語る。鷹子さんの事、義五郎、千鶴子のこと。

まことにこんなところで修と語り合ふなど、かつて誰が予想したらう。人生の数奇に感ずるばかりだ。修の家の門から廬山が美しく眺められる。家の前に古塔あり、能仁寺の塔²⁵である。

夜、門を出てみると月光に廬山はうすく浮き出てゐた。

(朱墨 欄外注) 承天院 梁武帝建立

注

(1) 第一冊裏表紙左端下部に「㊦フルース5四十八听正味四十枚(定価十四錢)」、第二冊は表裏とも無表示。

(2) 飯倉照平・小川利康「早稲田大学會津八一記念博物館所蔵『松枝茂夫旧蔵書簡』解題」、徳泉さち・小川利康「早稲田大学會津八一記念博物館所蔵『松枝茂夫旧蔵書簡』目録」(『文化論集』第五五号、早稲田商学同政会、二〇一九年九月)参照。松枝茂夫は、同年十一月十九日、周作人へ送った書簡で、筆者の北京訪問を通知している(小川利康「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇(3)」(『文化論集』第三二号、二〇〇八年三月、二七九頁)。

(3) 福岡市東区雁ノ巣にあった福岡第一飛行場(通称雁ノ巣飛行場)。一九三六年に糟屋郡和白村奈多の暴風林を切り開いて誕生した日本初の本格的国際空港。博多港湾鉄道(現JR香椎線)が近接し、当時八百メートル級二本の交差型滑走路があった。国策会社の大日本航空による朝鮮、台湾、中国、東南アジア各国間との国際路線があった。戦争の激化に伴い、軍民共用、次いで陸軍海軍共用となった。終戦後はアメリカ軍が接収、一九七二年に返還されたが、空港機能は再開しなかった。現地に記念碑がある。「福岡第一飛行場(通称雁ノ巣飛行場——戦前日本最大の国際空港)」(九州産業考古学会『福岡の近代化遺産』、弦書房、二〇〇八年)七九〜八〇頁参照。

(4) 「楠本」は、支那哲学史講座教授の楠本正継(一八九六〜一九六三、『北平日記』四二頁注一四三)。「松枝」は、支那文学講座助教授の松枝茂夫(一九〇五〜九五、佐賀県西松浦郡有田町出身、東京帝国大学支那文学科で筆者の一年後輩、一九三九年三月九州帝国大学講師に就任(四一年五月助教昇任)。「瀬利」は瀬利サクラ(一九一七〜二〇一〇、のち目加田と改姓)、福岡県大野城市出身、一九一六年三月に同大学国文科卒業し翌月より支那学研究室副手をつとめていた。「松本」は、同大学支那学研究室の学生松本眞昌(一九四〇年入学)。「渡辺」は渡邊文子(同上)または渡邊正気(一九四一年入学・国史)。「森」は森道男(一九四一年入学)または森一作(一九四二年入学)か。『九州帝国大学一覽

- 昭和十七年』所収「学生及生徒姓名（法文学部）」（九州帝国大学、一九四二年）三六八～三七四頁、「目加田サクラ教授年譜・著作目録」（『香椎潟』第二七号、一九八二年三月、二二八～二二九頁）、目加田さくを「追悼 目加田誠先生 支那文学研究室の元副手」（『中国文学論集』第二三三号、九州大学中国文学会、一九九四年十二月、二～五頁）、「荒木見悟博士追悼特集 アルバム」（『総合文化学論輯』第六号、総合文化学研究所、二〇一七年五月）六～七頁写真ほか参照。
- (5) 東亜旅行社満洲支部編『満支旅行案内 昭和十七年版』（博文館、一九四二年八月発行、二三二頁）によると、運行会社は、大日本航空会社。東京より大阪、福岡経由で上海まで定期運行していた。福岡から上海までの所要時間は三時間五十分、運賃は八十五円。
- (6) 柏号は、ダグラス社（現ボーイング社）製、特殊会社大日本航空所有のプロペラ機DC-3の四号機。DC-3は、一九三六年より運用が開始された実質的に世界初の本格的商業旅客機で、定員二十一人、時速約二百マイル（三二一キロメートル）。
- (7) 融は、筆者の長男。敬子は、次女。
- (8) 下の「車が」二字を抹消。
- (9) 下の「たかわからない」七字を抹消。
- (10) 能古島。福岡市西区、博多湾中央に浮かぶ周囲約十二キロメートルの島。
- (11) 下の「こめて」三字を抹消。
- (12) 下の「そのものだ」五字を抹消。
- (13) 下の「ますく低く」六字を抹消。
- (14) 下の「のせいか」四字を抹消。
- (15) 上海大場空港を指す。上海市宝山区大場鎮の東にある。一九三八年に日本軍が上海へ進撃した際、土地を収用して開設した。終戦後、中華民国国民党軍が接收、中華人民共和国成立後は中国人民解放軍管理の軍事専用空港となった。
- (16) 下の「がある」三字を抹消。
- (17) 頼信紙は、「電報頼信紙」の略称。電報を依頼する時、電文を書くのに用いる所定の用紙。
- (18) 下の「金入れ」三字を抹消。
- (19) 住友は、住友銀行（現 三井住友銀行）。「信用状」は、銀行が取引先の依頼により、その信用を第三者に対して保証

するために発行する証書。発行銀行は手形の引き受け、支払いを保証する。

(20) 下の「雁ノ巣で」四字抹消。

(21) 軍票は、「軍用手票」の略称。戦争に際して主として占領地で軍の作戦行動に必要な物資や労力への支払い、軍人・軍属の俸給・給与の支払いに用いるために発行する特殊通貨で、日中戦争時にも発行された。

(22) サック〔英 sack〕は、小形の袋、入れ物。

(23) 筆者は、一九三五年三月、北京留学の帰途、上海に立ち寄った際にも内山書店を訪ね、魯迅と面会した。『北平日記』二二六頁。店主の内山完造（一八八五―一九五九）は、岡山県井原市生まれ、はじめ大学目葉の海外出張員となり上海へ渡航した。一九一七年、妻の美喜は魏盛里にあった自宅の玄関先で小さな本屋を始めた。一九二九年、北四川路に本格的な書店を開く。翌年完造は大学目葉を辞職して店主となった。終戦後も上海に在ったが、一九四七年十二月に日本へ強制送還されたが、最晩年まで日中交流に尽力した。上海内山書店には魯迅をはじめ多くの文化人が集った。内山完造宅は、内山書店の裏口から狭い路地をはさんだ向かいにあった。二〇二二年十一月二十六日、跡地に「一九二七・魯迅與内山紀念書局」が開店した。内山完造『花甲録』（岩波書店、一九六〇年）、太田尚樹『伝説の日中文化サロン上海・内山書店』平凡社新書四三六（平凡社、二〇〇八年）、上海市人民政府公式ウェブサイト内「要聞動態 1927 魯迅與内山紀念書局在内山書店旧址開業 走進來坐下來、和魯迅先生『相聚』」（URL = <https://www.shanghai.gov.cn/nw4411/20221127/d9e39ee0ebcb444a734be8a5a9f0cb5.html>、最終確認日二〇二三年三月十四日）ほか参照。

(24) 下の「緑苑」二字を抹消。

(25) 小野忍（一九〇六―八〇）は、東京生まれ。東京帝国大学支那文学科で筆者と同期。富山房（百科事典編纂担当）などを経て一九四〇年七月に南満洲鉄道株式会社入社、上海事務所勤務しており、一九四二年十月に本社へ異動した。一九四三年十月に同社を辞し、同年十二月より民族研究所嘱託となる。戦後は、国学院大学、東京大学、和光大学などで教鞭を執った。東京大学名誉教授。著書に『中国文学雑考』（大安、一九六七年）、翻訳にカール・グレン『左伝真偽考』（文求堂書店、一九三九年）、茅盾『腐蝕』（筑摩書房、一九五四年）、共訳に『金瓶梅』中国古典文学全集（平凡社、一九五九―六〇年）、『西遊記』岩波文庫（岩波書店、一九七七―八〇年）などがある。筆者は『祝福』の書かれた頃『東京支那学報』第十三号、東京支那学会、一九六七年六月、三三―五〇頁）で次のように回想した。『昭和十七年の秋、私が上海に渡ったとき、満鐵にいた小野さんに一方ならぬお世話になって以来、ほんとうに私のもつとも親しい人

の一人になった。その時、福岡から大場鎮の飛行場についた私が、財布をなくしていることに気づき、途方に暮れて小野さんのアパートに駆けこみ、内山完造さんの家につれてゆかれた。なに、旅費などいくらでも貸してあげる。心配なく旅行をつづけなさい。と内山氏に勵まされたが、二ヶ月に至るこれからの中國旅行の計畫を、どうなるものでもない。ともかく夜更けまで内山さんの中國はなしを聞かされて、いざ三階に上つて寝ようとしてトランクを開くと、その中に財布が平氣な顔ではいつていた。雁の巢の税關で検閲をうけたとき、財布も一緒にトランクに放りこんでいたのである。この時のあわてぶりを、後々まで小野さんは語つて痛快がるのである……五月二十八日追記——。このほか目加田誠「小野忍先生追悼録——小野さんのこと」(『東方学』第六二輯、一九八一年七月、一八六—一八八頁。のち『中国文学随想録』目加田誠著作集第八卷(龍溪書舎、一九八六年)に再録)、小野忍「皇后飯店」(目加田誠博士古稀記念中国文学論集編集委員会編『目加田誠博士還暦記念中国文学論集』、龍溪書舎、一九六四年、四五九—四六一頁)などにも回想がある。

- (26) 共產主義運動の嫌疑で主要なスタッフが大量検挙された「満鉄事件」を指すか。一九四二年九月二十一日、関東軍憲兵隊は、マルクス主義的方法による調査研究者として具島兼三郎・野々村一雄・堀江邑一ら現旧満鉄職員二十五名その他を検挙した。これ以降も検挙者が続出して、満鉄調査部は事実上壊滅状態となり、翌年五月調査局に縮小改組されることになった。「ジャパンナレッジ 国史大事典」、草柳大蔵『実録満鉄調査部』(朝日新聞社、一九七九年)、石堂清倫・野間清・野々村一雄他『十五年戦争と満鉄調査部』(原書房、一九八六年)ほか参照。

- (27) 下の一字を抹消、判読不能。

- (28) 下の「二階で夕食。この家は三階になり一緒に応接間、二階は居間、三階の小室に泊る」三十六字を抹消。

- (29) 下の「印象ぶかい事ばかりだ」十字を抹消。

- (30) 下の「で」字を抹消。

- (31) 行頭「小野」二字を抹消。

- (32) 来薰閣は、北京の琉璃廠にあった筆者馴染みの古書店で、店主は陳杭(字済川、一九〇二—六八)。『北平日記』一二二頁注二〇、「北京旅行日記(二)」三九頁注七一。上海支店は、一九四一年十月威海路永吉里九号に開業、支店長は張世堯(陳杭の父方の従弟)で、戯曲小説を重点的に取り扱った。雷夢水「琉璃廠書肆四記」(孫殿起編集『琉璃廠小志』(北京古籍出版社、一九八二年)一四五頁、姚一鳴『中国旧書局』(金城出版社、二〇一四年)九〇—九四頁参照。

(33) 憲兵は、陸軍で軍事警察をつかさどる兵で、一八八一年にフランスの憲兵制度を模範にして制定された。主要任務、軍機保護、軍港・要港・徴兵・鉄道・服役・召集・戒厳などに関する法令の執行、軍紀・風紀の維持など広範囲にわたった。上海の憲兵隊本部は、第二次上海事変後（一九三七年）虹口の七階建てビルを買取して開設された。建物は戦後、国民党軍警備司令部、中国銀行職員宿舎となる。上海市優秀歴史建築、四川北路一八一号。

(34) 下の「りしも」三字を抹消。

(35) 早稲田大学會津八一記念博物館松枝茂夫文庫に、この日筆者が松枝茂夫へ送った絵葉書がある。飛行機の感想や内山書店店主との懇談、小野忍の大連転勤情報などを記す（発信元住所〓上海北四川路 内山書店、郵政明信片、目錄番号五一四）。

(36) 上海海軍特別陸戦隊、通称「シャンリク」。海軍の陸戦隊は、戦時に、海外居留民の保護、陸軍の上陸掩護、局地の暫時占領、海陸交通の保護などのほか、特殊の任務によって、歩兵隊および砲兵隊の陸上部隊として行動した。一九二七年二月、国民党北伐から日本人居留民を保護することを目的に上陸したことを契機とする。一九三二年の上海事変後、常設化された。当時の本部は、一九三七年の第二次上海事変後に漢璧礼女校（ハンペリー・スクール、現海南路十号）を占拠して設置されたもので、戦後は、国民党空軍供応司令部、虹口区人民政府・党委員会が置かれた（区政府は二〇〇四年飛紅路五一八号へ移転）。吉川和篤『上海海軍特別陸戦隊写真集』（大日本絵画、二〇一三年）ほか参照。

(37) 陶晶孫（一八九七―一九五二、本名は陶鐵）は、江蘇省無錫生まれ、郭沫若の義弟（妻同士が姉妹）。一九〇六年に父と来日し、第一高等学校から一九一九年九州帝国大学医学部に入學した。一九二二年に郭沫若らの創造社同人となる。一九二三年同大学卒業。その後、東北帝国大学で音響生理学を研究しつつ、交響楽団をつくって指揮者をつとめた。一九二九年一月に上海東南医学院教授となり、一旦帰郷。一九三一年十一月東方文化事業総委員会上海自然科学研究所研究員（病理学科）となり、小宮義孝（一九〇〇―七六）とともに寄生虫研究に従事した。帰国後もしばらく文藝活動を続けていたが、一九三〇年代半ば以降は医学に専心した。日中戦争が始まると、日本の対中文化政策への参加を求められ、中日文化協会上海分会理事に就任。戦後は、南京陸軍病院の接収に立ち会い、一九四六年台湾大学教授となる。一九五〇年に来日して東京大学文学部講師をつとめた。松枝茂夫は、この半年前、同年四月に陶晶孫と面会していた。陶晶孫は翌一九四三年四月に来日、このとき筆者と松枝茂夫宛に送った葉書も、さきの早稲田大学會津八一記念博物館にある。松枝茂夫「紹興紀行——一九四二年春——」（『松枝茂夫文集』第二卷、研文出版、一九九九年、二一九―二三八）

頁)。中村みどり「戦時における日中研究者のつながり——松枝茂夫宛陶晶孫関連書簡二通について」(『文化論集』第五号、早稲田商学同公会、二〇一九年、二四五～二五八頁)

(38) 四川北路一六〇〇号にあった広東料理の茶館、一九二七年開業。建物は二〇〇四年秋に取り壊された。

(39) 新亜細亜ホテル(新亜大酒店)は、一九三四年一月、日本租界北四川路に開業した。八階建て、部屋数三百五十(当時)で、賭博、売春、阿片を持ち込まない「三不主義」を経営方針とした。建物は、上海市優秀歴史建築に指定され、現在も営業中。天潼路四二二号。国立国会図書館デジタルコレクション(URL = <https://dl.ndl.go.jp/>、以下「[国図]」と略称)『中南支工商名鑑 昭和十五年版』(日本商業通信社、一九四〇年) 広告四九頁参照。

(40) 森永製菓株式会社上海出張所売店、北四川路八七九号。[国図] 塚本義隆編『中国工商名鑑 昭和十七年版』(日本商業通信社、一九四二年) 六四八頁参照。

(41) 中華書局は、一九二二年元旦に陸費逵(一八八六～一九四二)が上海に創設した。小中学校の教科書を皮切りに『辞海』、『四部備要』はじめ古籍や幅広い分野の学術書を出版していた。一九一六年、福州路と河南路の角、商務印書館(後述)に隣接して五階建ての自社ビルを竣工、各地に分局を置いていた。掃葉山房は、明代万暦年間(一五七三～一六二〇)創業の老舗で、廉価な石印により古籍を数多く影印出版した。棋盤街に北号総店、呉城彩衣街に南号分店があった。商務印書館は、一八九七年(光緒二十三年)二月十日、夏瑞芳、アメリカ長老会の印刷所である上海の美華書館で勤務していた夏瑞芳(一八七一～一九一四)らが、長老会の牧師G・F・フィッチに援助を受け設立した。屋号は初め商業簿記を主に取り扱ったことに由る。張元済(一八六七～一九五九)、王雲五(一八八八～一九七九)らが経営に携わり、教科書や『辞源』、『四部叢刊』、『万有文庫』はじめ数多くの学術文藝書を出版した。一九二二年河南中路二二一号に総發行所ビルを、一九二四年宝山路に東方図書館を創設した。一九三二年の第一次上海事変の際、宝山路の東方図書館、総管理処、印刷所などが爆撃により大きな被害を受けた。前掲『中国旧書局』八～一二・一〇八～一二三頁参照。

(42) 百新書店は、河南中路一七九号にあった書店。『小学生求解・註音・辨詞・作文四用字典』(百新書店、一九四一年二月) 参照。

(43) 巴金(一九〇四～二〇〇五)は、本名は李堯棠、字は芾甘。四川省成都の大地主の家に生まれた。五四運動の影響を受けて、一九二三年より故郷を離れて上海、南京、北京に遊んだ。一九二七年から一年間パリに留学して処女作『滅亡』を執筆し、一九二九年一～四月『小説月報』に連載されると一躍注目を浴びた。一九三一年に『家』を発表、因襲的な

大家族で育った主人公が新思想の洗礼を受けて上海を目指すまでを描いて、若者たちに大きな影響を与えた。次いで一九三八年に『春』、一九四〇年に『秋』を著して「激流三部作」を完成させた（すべて上海開明出版社刊）。一九三四年十一月から翌年八月まで、横浜、東京に滞在して日本語を学んだ。その後も執筆活動を続け、文化大革命中は下放された。のちに中国作家協会主席となり、たびたび来日、福岡アジア文化賞一九九〇年（第一回）創設特別賞を受賞した。『巴金全集』全二十六卷（人民文学出版社、一九八六～九四年）がある。大野城心のふるさと館所蔵なし。飯塚朗「苦悶の作家——巴金の生ひ立ち——」（『中国文学』終刊号、中国文学研究会、一九四三年三月、三三三～三三〇頁）、山口守「巴金『家』のテクスト変容——小説・戯曲・映画をめぐる」（『日本中国学会報』第六〇輯、二〇〇八年、二二六～二四一頁）、濱田麻矢「巴金『家』（一九三三）」（武田雅哉ほか『中国文学をつまみ食い』、ミネルヴァ書房、二〇二二年、一〇六～一〇七頁）ほか参照。

- (44) 中央儲備銀行を指す。中華民国の汪兆銘政権の中央銀行で、一九四一年一月六日に開業。銀行券「儲備券」を発行した。ポツダム宣言受諾に伴い閉鎖された。
- (45) 下の「金陵仏租界に入り」八字を抹消。
- (46) 金都大戲院は、一九三九年辣斐德路福熙路角（現、延安中路五七二号）に開業した映画専用劇場で、座席数一千五百。現在は閉鎖されている。〔国図〕日本映画協会編『映画年鑑 昭和十八年』（日本映画協会、一九四三年）六六九頁参照。
- (47) 下の「の」一字を抹消。
- (48) 下の「きわめてのんきな姿だ」十字を抹消。
- (49) 下の「往来」二字を抹消。
- (50) 一九四一年十二月、ナチスドイツ支配下のヨーロッパから約一万八千人のユダヤ人が、上海租界へ逃れて来ていた。折しも太平洋戦争が始まり、日本軍が租界に進駐して実質的な行政権を掌握した。筆者の訪れた一九四二年十月より十三歳以上のイギリス、アメリカ、オランダ人は「敵性国人」として赤い腕章を着用することが義務付けられた。翌年八月、共同租界は返還されて上海特別市第一区となり汪政府管理下に入った。阿部吉雄「上海のユダヤ人ゲットー設置に関する考察」（『言語文化論究』第十五号、九州大学大学院言語文化研究院、二〇〇二年二月、四五～五九頁）参照。
- (51) 横の「実」字を抹消。
- (52) 「松井」は、未詳。『昭和十五年七月一日現在 社員録』（南満州鉄道総裁室人事課、一九四〇年）等に松井姓職員に、

堯政、寛治、正男、清市らの名があるが、いずれも該当しない。また、上海満鉄会『長江の流れと共に——上海満鉄回想録——』（上海満鉄回想録編集委員会、一九八〇年）所収一九四二年「全員写真 伊藤・宮本両所長送迎記念会」等に松井姓の記載なし。或いは、上海青年会事務局長の松井松次（一九〇八〜八二）を指すか。長野県出身、東京高等師範学校英語科卒業、一九三六年十一月、上海日本近代科学図書館設立のため赴任（一九三九年五月頃）、一九四〇年四月より同職。中西利八『満州紳士録』第三版（満蒙資料協会、一九四〇年）『日本人物情報大系』第十四巻、皓星社、一九九九年覆刻）、ウェブサイト「福岡大学人文学部東アジア地域言語学科大澤武司研究室松井松次資料館」（URL＝<http://www.din.or.jp/~osawa/matsui.html>、最終確認日＝二〇一三年十月十二日）ほか参照。待考。

- (53) 「水野」は、水野薫（一八九七年生）か。愛媛県出身、一九二〇年盛岡高等農林学校農林科卒業、一九二五年南満洲鉄道入社。天野元之助（一九〇一〜八〇）主導の中国東北部の農村調査に同行した。一九三九年華北交通株式会社総裁室調査役、翌年同社資業局農畜林主幹、中央鉄路農場長。著書に『北支の農村』（華北交通社員会、一九四一年）、『北支名物夜話』（満鉄社員会、一九四一年）などがある。天野元之助ほか「鼎談 天野元之助中国研究回顧」（天野弘之・井村哲郎『満鉄調査部と中国農村調査——天野元之助中国研究回顧——』、不二出版、二〇〇八年）ほか参照。待考。

- (54) 下の「陵」字を抹消。

- (55) 一九四二年九月二十四日封切、中華連合製片股份有限公司製作、監督＝楊小仲、主演＝李麗華、徐立。一九四一年「家」（中国連合影業公司、脚本＝周胎白、監督＝ト万蒼ほか）が人気を博したことから、「春」（中華連合製片股份有限公司、監督＝楊小仲一九四二年九月公開）とともに製作、公開された。配給元の中華連合製片股份有限公司は、一九四二年四月創設の中国劇映画の独占的製作会社。辻久一「中華電影史話——一兵卒の日中映画回想記（一九三九〜一九四五）」（凱風社、二〇一六年）参照。

- (56) 下の「可成り」三字を抹消。

- (57) 下の「望めば」三字を抹消。

- (58) 『雑誌』は、雑誌社（上海山東路二九〇号）の文藝雑誌。一九三八年五月十日（創刊号）〜一九四一年一月十五日（九卷第四期）は月二回発行、一九四二年八月十日（復刊第一号第九卷第五期）より月刊誌となり、一九四五年六月十日（復刊第三十五号第十五卷第三期）まで発行されたと見られる。筆者が購入した『雑誌』は、復刊第三号第十巻第一期（一九四二年十月十日、呉誠之編集、価格五元）か。中国国家数字図書館民国時期文献ウェブサイト（URL＝<http://read.>

nlc.cn/specialResource/mingIndex' 以下「[中数]」と略称) 参照。大野城心のふるさと館所蔵なし。

- (59) 『小説月報』は、連華広告公司(寧波路四七〇号)が一九四〇年十月―一九四四年十一月の間に四十五回発行した月刊誌。『中国文学』第六十六号(一九四〇年十一月)には「商務印書館發行の著名な文藝雜誌と同名であるが、内容は全く異り、娯樂的な通俗文藝を盛つてゐる」などと紹介されている(三二―四頁)。筆者が購入した『小説月報』は、二十五期(一九四二年十月一日、顧冷観編輯兼發行、五元)。大野城心のふるさと館所蔵なし。

- (60) 『万象』は、万象書屋(上海福州路世界里六号)が一九四一年七月から一九四五年六月(第四年第七期)まで発行した月刊文藝誌。筆者が購入した『万象』は、第二年第四期(一九四二年十月一日、陳蝶衣編輯、五元)か。〔中数〕最終確認日二〇二三年三月二十五日。大野城心のふるさと館所蔵なし。

- (61) 『古今』は、南京の古今月刊社が一九四二年三月―一九四四年十月に五十七回発行した文藝雜誌。第八号まで月刊、以後月二回刊。筆者が購入した『古今』は、第八期(一九四二年十月一日、周黎庵主編、一元五角)または第九期(一九四二年十月十六日、陶亢徳・周黎庵主編)。大野城心のふるさと館所蔵なし。

- (62) 予且(一九〇二―九〇)は、潘予且、本名潘序祖、字子端、安徽省涇県出身。上海の聖ヨハネ大学(聖約翰大学)から光華大学に転じて特別卒業生として卒業、光華大学付属中学の西洋史教師となる。その傍ら小説を書き始め、中華書局編輯に転じた。日中戦争勃発後、一旦上海を離れたが一九三九年に上海へ戻り、通俗的な小説を精力的に発表した。一九四二年十一月四日より東京で開かれた第一回大東亜文学者大会に中支代表七名うちの一人として出席し、東方文化研究院の設立を要望した。翌年八月には『予且短編小説集』(太平書局、一九四三年)で大東亜文学次賞を受賞した。一九五〇年代以降は学校教育に専念した。筆者購入誌の掲載作品名は、『雜誌』復刊第三号第十卷第一期『「碧雲天外」』、『小説月報』二五期『「浅水姑娘」』、『万象』第二年第四期『「乳娘曲」』、『古今』なし。〔中支文化代表勢揃ひ〕(『朝日新聞』、一九四二年十月二十二日朝刊三頁)、『文学賞を作らう』文化研究所も設けたい――大東亜文学者大会第二日の議事(同上、同年十一月六日夕刊二頁)、陶亢徳「華中 不老の文学者・予且」(同上、一九四三年八月二十八日朝刊四頁「受賞の作品と人」)ほか参照。

- (63) 丁諦は、呉調公(一九一四―二〇〇〇)の筆名、原名は呉鼎第、調公は字、江蘇省鎮江出身。一九三五年大夏大学国文系を卒業、この頃から散文や小説を書き始めて一九四一年に『海市集』(世界書局)を出版した。中学や師範学校で教え、一九五五年南京師範大学講師となり、副教授・教授に昇任した。著書に『李商隠研究』(上海古籍出版社、一九八二

(年)、『古典文論與審美鑒賞』(齊魯書社、一九八五年)などがある。筆者購入誌の掲載作品名は、『雜誌』=『錦瑟』、『小説月報』=『雪夜』、『万象』(第二年第四期は「長江之夜潮」、『古今』なし)。「當代著名古典文學專家文藝理論家——吳調公先生」(『陰山學刊』一九八八年〇三期、包頭師範學院、二頁)、高小康「活的歷史活的美學——論吳調公的中國文藝美學史研究方法」(『文學遺產』二〇〇三年〇四期、中國社會科學院文學研究所、一二五—一三四頁) 参照。

(64) 筆者弟、足立修。

(65) 横浜正金銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)は、一八八〇年設立の貿易金融専門銀行。上海支店(中山一路二四号)は、一八九三年開設。筆者の訪れた建物は、パーマー&ターナー事務所(公和洋行)設計、一九二四年竣工。現在では上海市優秀歴史建物に指定され、中国工商银行上海分行営業部がある。

(66) 王実甫『西廂記』は、中唐の元稹『会真記』(別称『鶯鶯伝』)をもとに創作された元雜劇で、中国演劇史上最高傑作と称される。初期の英訳には、熊一式(Hsing Shih-I)による全訳『The romance of the western chamber: a Chinese play written in the thirteenth century』(Methuen Publishing 一九三五年)全訳、ヘンリー・ハート(Henry H. Hart)による節訳『The West Chamber: a medieval drama』(Stanford University Press 一九三六年)の二種がある。曾超「論『西廂記』及其英譯本研究中的版本問題」(『湘南学院学報』二〇一八年〇六期・第三九卷、湘南学院、六二—七〇頁) 参照。大野城心のふるさと館所蔵なし。

(67) 上海自然科学研究所(岳陽路三三〇号)は、東方文化事業総委員會の組織。建物は内田祥三設計、一九三〇年秋に竣工し、翌年四月二十日に開所式が行われ、横手千代之助(一八七一—一九四一、東京帝国大学名誉教授、衛生学)が初代所長署理に就任した。敷地は約二万坪、建物は延二・五九一坪、一七一室。物理学、化学、生物学、地質学、病理学、細菌学、生薬学の七科があり、日中双方の研究員により各科三—六名(中国人は日本留学経験者)で構成されていた。一九三五年三月に第二代所長署理新城新蔵(一八七三—一九三八、京都帝国大学第八代総長・名誉教授、天文学)が就任、研究成果が相次いで公表された。日中戦争開始後、新城新蔵が客死するなど徐々に研究環境は悪化、終戦に伴い接収された。建物は、上海市優秀歴史建築に指定され、中国科学院上海生命科学研究院となっている。阿部洋「『对支文化事業』の研究——戦前期日中教育文化交流の展開と挫折」(汲古書院、二〇〇四年)、山根幸夫「東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流」(第三章 上海自然科学研究所)(汲古書院、二〇〇五年) 参照。陶氏は、前出の陶晶孫。

(68) 「同文書院」は、東亜同文書院大学の略称。東亜同文会が、中国を富強にし、日中友好に資する人材を育成することを

目指し、一九〇〇五月、南京同文書院を設立したことに始まる。義和団事件のため、翌年五月、上海高昌廟に移り、東亜同文書院を設けた。辛亥革命時の製造局砲撃により破壊され虹口へ移転、一九一七年に新校舎が完成した。日本政府の補助金によって運営され、学生は各府県から公費派遣されていた。一九三七年十一月再び焼失、翌春、日本軍が占拠していた交通大学（徐家匯海格路）の臨時校舎へ移転した。一九三九年、大学に昇格したが、終戦に伴い閉校し、一部が愛知大学に継承された。『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌』（滬友会、一九八二年）、中里見敬「東亜同文書院の伝統的中国語教授法『念書』とその戦後における継承」（『中国研究論叢』第二二号、霞山会、二〇一三年二月、七三〜九三頁）ほか参照。

- (69) 小竹文夫（一九〇〇〜六二）は、石川県出身、弟の武夫（一九〇五〜一九八二、『北平日記』二五頁注一五）は、筆者の北京留学時代の友人。一九二二年六月東亜同文書院卒業、翌月同書院助教となる。一九二五年四月京都帝国大学支那史学科に入学、一九二八年三月同卒業。再び東亜同文書院に戻り教授に就任し東洋経済史、東洋思想史、中国文化概論などを担当した。のち、金沢大学、東京教育大学教授。著書に『近世支那経済史研究』（弘文堂、一九四二年）、『上海三十年』（弘文堂、一九四八年）、『現代語訳史記』（弘文堂、一九五六〜五七、文夫と共著）などがある。牧田諦亮「本會評議員小竹文夫氏を悼む」（『東洋史研究』第二一卷第三号、東洋史研究会、一九六二年十二月、三六二〜三六三頁）、東亜同文書院大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』（滬友会、一九八二年）一五七頁ほか参照。

- (70) 鄭振鐸編『中国版画史図録』（別称『中国版画史』、中国版画史社、一九四〇〜四二）を指す。鄭振鐸（一八九八〜一九五八）は『良友』一九四〇年一月号（良友圖書雜誌社）に「譚中国的版画」を寄せ、巻末近くに大々的な広告を載せて、自身の蔵書や国内の名画を二年計画で本文四巻図録二十巻六帙を四ヶ月に一回、二百部限定五十元で覆刻販売すると発表した。見本によると中国語、英語による解説が付されている。太平洋戦争開戦直後、出版元は日本軍に接収され、図録は四輯一六巻で終わった。二〇一二年中国書店より影印本五冊が刊行された。『中国版画史』（中国文学）第六二号、中国文学研究会、一九四〇年、一四〇頁、趙家璧「回憶鄭振鐸和他的『中國版畫史』——紀念鄭振鐸逝世二十五周年」（『新文学史料』一九八三年〇二期、人民文学出版社、一八三〜一九四頁）ほか参照。

- (71) 筆者は一九三八年春より新課程「支那時文」の教育者向け講習に携わり、翌年『中等時文教科書』（目黒書店）を刊行している。六角恒廣『近代日本の中国語教育』（播磨書房、一九六一年）ほか参照。

- (72) 上海の競馬場（跑馬厅）は、一八四八年に最初のレースコースが現南京東路河南中路北西側に創設された。当時のコー

スは三代目で、一八六二年に現在の西藏路の西側に作られたもの。コース内側には、プール、九ホールのゴルフ場、クリケット場、野球場などがあつた。戦後、競馬は開催されず、南半分は人民広場、北半分は人民公園に整備された。

- (73) 大三星は、〔国図〕美濃部正好編『江南の旅』（華中鉄道、一九四二年）上海の常熟料理店として唯一挙げられている（二一〇頁）。

- (74) 「西村君」は、南満洲鉄道株式会社上海事務所の西村捨也（一九〇三生）か。前任は上海自然科学研究所図書係司書（一九三二年四月～一九四二年九月）。戦後は九州工業大学や最高裁判所図書館に勤務した。西村捨也「現地随筆 劉氏嘉業堂の書物」〔文藝春秋〕第十六巻第十号、文藝春秋社、一九三八年六月）一一八～一一九頁、「1. 研究所職員及傭人二関スル報告 昭和十年一月」（アジア歴史資料センター RefB0601518300、上海自然科学研究所関係雑件 第一巻、EJ-3202-001、外務省外交史料館）、〔国図〕『図書館雑誌』第三十六年第十一号（一九四二年十一月）七〇～七一頁、西村捨也「フランスにおける近代図書館の成立」〔図書館学』創刊号、西日本図書館学会、一九五四年六月）一～十二頁ほか参照。

- (75) 「小玉君」は、上海自然科学研究所化学科の小玉数信（一九一四年生）か。一九三七年着任。〔中教〕『中日文化協會兩周年特刊』（〔中日文化協会〕、一九四二年）、一〇五頁、最終確認日二〇一三年三月二十九日）、八耳俊文「地球化学を生きた人——岡田家武」〔サイエンスネット〕第三十号、数研出版、二〇〇七年、六～九頁、URL = <https://www.chart.co.jp/subject/rika/scnet/30/sc30-2.pdf>、最終確認日二〇一三年三月二十九日）参照。上記の参会者「張君」は、小玉数信の同僚、上海自然科学研究所化学科の張定釗か（前掲『東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流』七四頁）。

- (76) 下の「いや」二字を抹消。

- (77) 煨鶏（別名「叫化鶏」）は、江蘇省常熟の伝統料理。下処理した鶏を蓮の葉で包み、それを土で包んで丸ごと炉で蒸し焼きにしたもの。乞食が鶏を盗んだが、鍋がなかったのでこの方法で調理したのが始まりという。

- (78) 『四庫全書』は、清の乾隆帝（一七一～一七九）の勅命により編纂された叢書で、経、史、子、集の四部約三、四六〇種、七万九千巻。正本七部は、文淵閣（紫禁城）、文源閣（円明園）、文津閣（熱河 避暑山莊）、文溯閣（瀋陽）、文匯閣（揚州）、文宗閣（鎮江）、文瀾閣（杭州）に、副本一部が翰林院に収蔵された。杭州の文瀾閣は、一八六一（咸豐十一年）、太平天国軍により一部焼失した。これを憂えた丁申、丁丙兄弟は、密かに『四庫全書』を搬出して上海へ移送、

嘉惠堂へ安置して補鈔を開始した。一九一一年に浙江図書館（現浙江省図書館）へ移管された。館長の錢恂（一八五三—一九二七、錢稻孫の父）らは補鈔作業を進め、一九二三年に錢恂編『壬子文瀾閣所存書目』が完成した。日中戦争が始まり杭州に日本軍が侵攻、一九三八年二月に日本の「占領地区図書文件接收委員会」が同館を訪問した。そこで同年四月、接收を防ぐため秘密裏に貴州貴陽市へ移のち、終戦まで地母洞に隠蔵された。一九四六年五月から二ヶ月かけて杭州へ戻された。岡村敬二「遺された蔵書——滿鉄図書館・海外日本図書館の歴史」（阿吡社、一九九四年）八〇—一二四頁、雷有梅「探尋文瀾閣『四庫全書』的前世今生——抗戰時期文瀾閣『四庫全書』的貴州之行」（『遺産與保護研究』二〇一八年〇七期、北京卓衆出版有限公司、一四六—一四八頁）参照。

(79) 下の「転」と思しき一字を抹消。

(80) 南京の国家図書館は、日中戦争開始に伴い、一九三七年八月十五日閱覽を停止し、重要図書二六三箱を故宮博物院新建密庫へ移送、さらに精選一三〇箱は武漢、長沙經由で重慶へ移送、一九四一年二月に中央図書館重慶分室を開設して保全し、さらに文献収集につとめた。購入図書をアメリカ合衆国議会図書館へ疎開準備中、太平洋戦争が始まり、善本百数十箱は日本軍に運び去られた。これらは戦後、日本の帝国図書館で発見され、協議の末、南京へへ戻されたが、第二次国共内戦中に台湾へ移送された。長澤規矩也「古書のはなし——書誌学入門」（富山房、一九七六年）一七〇—一七三頁、前掲「遺された蔵書——滿鉄図書館・海外日本図書館の歴史」、「曲論の系譜——南京事件期における図書掠奪問題の検証」（『立命館言語文化研究』一四卷二号、立命館大学国際言語文化研究所、二〇〇二年九月、二三—一三八頁）ほか参照。

(81) 括弧内は朱墨による。

(82) この部分の記述は不正確と思われる。嘉業堂は、浙江省湖州南潯の蔵書家劉承幹（一八八二—一九六三）の蔵書楼（『北京旅行日記（一）五二頁注一〇一）。日中戦争が始まると、劉氏は貴重書を持ち出した。他方、大連在住の松崎鶴雄（一八六七—一九四九）は、義兄で嘉興に本部を置く守備隊の隊長であった牧二郎少将に嘉業堂蔵書への特別配慮を懇願した。その結果、嘉業堂の書物と建物は保全され、甚大な損失を免れたという。岡井慎吾「劉氏嘉業堂の書物」（『書誌学』第十卷第五号、日本書誌学会、一九三八年五月、二九—三二頁）、高橋智「書誌学のすすめ——中国の愛書文化に学ぶ」（東方書店、二〇一〇年）九一—九二頁。

(83) 章太炎（一八六九—一九三六）は、満州事変・上海事変を受けて抗日宣言を発表した。「国学研究会」は、章太炎が晩

年に蘇州で主宰した「章氏国学講習会」を指すか。同会は、一九三五年九月に蘇州で機関誌『制言』を創刊、第四七期（一九三七年八月）で休刊した。一九三九年一月に復刊、半月刊から月刊へ改め、事務所を蘇州から上海福州路河南路口五洲大樓に設置すると宣言した（第四八期「章氏国学講習会通告」）が、一九四〇年三月、六二期で終刊した。また、一九三九年二月、上海に太炎文学院を創設されたが、一年半で閉院となった。周勵恒「太炎文學院の創辦及終結」（『史學理論與史學史學刊』二〇一〇年下卷總第十三卷、CNKI摘要参照（URL = https://cnh-oversea.cnki.net/ezproxy.lib.kyushu-u.ac.jp/KCMS/detail/detail.aspx?dbcode=CCJ&dbname=CCJDLAST2&filename=SWXS202002010&uniplatfrm=OVERSEA&v=Wk_Pd7MosidTBdmvBkL0rvOpYm5zDHORpGHI1A-XWsmZm25FvxcxCrftHqQw1）最終確認日 = 二〇二三年三月二十三日）。筆者の北京留学報告に章太炎の章がある。『北平日記』二二〇頁注二九。

- (84) 弄堂〔中 nòng táng〕は、上海の住宅街に設けられた共同通路。竹内好「旅日記抄（二二）」（『中国文学』第八七号、一九四二年八月、二〇二二二頁）参照。

- (85) 下の一字を抹消、判読不能。

- (86) 下の「こと」に支那人の集まつてゐる町は」十五字を抹消。

- (87) 工部局は、一八五四―一九四五年の間、上海租界にあった自治行政機関。名称は、初め土木建設事業に当たったこと由来する。形式的には市参事会の下部機関で、警察部、教育部、図書館など十三の部局があった。

- (88) 上海市政研究会は、一九四一年七月、元外交官で工部局参事の岡本一策（一八八九―一九四六）を中心に創設された。上海租界の行政、財政、経済及び文化の実態を調査し、租界対策の基礎資料を作成することを目的とし、岡本の事務所内に設置された。¹⁵³ 支那の租界問題と第三国の行動（東方文化学院研究員、植田捷男）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:B02030931800、本邦対内啓発関係雑件／講演関係／日本外交協会講演集 第十卷（A-3-3-0-2.1.2_010）（外務省外交史料館）、大分県豊後大野市公式サイト「豊後大野ゆかりの人物」（URL = <https://www.bungo-ohno.jp/docs/202101200053/>、最終確認日 = 二〇二三年三月二十三日）参照。

- (89) 「山岸女史」は、中国婦女協進会主宰の山岸多嘉子（一九〇六―六六、中国名＝楊嘉香）。前日夜、陶晶孫の招宴に同席した「山室女史」と同一人物か。新潟県高田市出身、新潟県議会副議長・宏隆の長女、東京女子大学国文科卒業。盧溝橋事件後間もなく『婦人公論』特派員として中国各地を慰問し、『婦人従軍記』（中央公論社、一九三八年）を著した。一九三八年十二月に上海へ移り、翌年一月、中国人女性の教養向上を目指して浦東南区東昌路新浦東里に中国婦女協進

会を設立した。日本語や刺繍・裁縫指導のほか、三万坪の農園では花卉・農産物栽培、家畜飼育などを指導した。その後、東亜同文書院大学教授の小岩井淨（一八九七～一九五九、愛知大学第三代学長）と結婚。一九五〇年、愛知県豊橋市の愛知大学公館（旧第十五師団長官舎）占領軍接収宣言の直後、マッカーサー元帥夫人宛に書簡を送ったことが功を奏し、接収は取り消されたという。晩年まで平和運動に専心した。「大陸の夏に働く女性（一）姑娘が母とも慕う 宣撫の誓い 山岸多嘉子さん」（『朝日新聞』一九三九年七月一日朝刊六頁）、「4. 学会協会（5）山岸多嘉子主宰中国婦女協進会 14、8」（アジア歴史資料センター Ref:B05016192000、参考資料関係雑件／宗教、病院、図書館、博覧会、教会関係 第二巻、H73043002、外務省外交史料館）（国図）久保田好郎「新潟人物伝 山岸多嘉子（一）」（四）（『センター月報』二二六～二二九号、新潟経済社会リサーチセンター、一九九二年七月～十月）ほか参照。

- (90) 在上海日本近代科学図書館を指す。東方文化事業総委員会が北京近代科学図書館（『北京旅行日記（一九三六年）』（二）三八頁注五七））とともに一九三七年三月四川路一四九号宏業大廈に開設した。館長は、元東京朝日新聞経済部次長の上崎孝之助。日中戦争開戦に伴い一九三八年八月より十ヶ月間閉鎖したことがある。北京が人文科学、自然科学に関する学術図書中心であったのに対し、上海は実用性を重視して幅広い分野の図書を収蔵し、利用者も日中の市民が多かったという。終戦に伴い書籍は中華民国に接収された。¹³ 上海図書館開館二閱スル件 昭和十二年三月（『アジア歴史資料センター Ref:B05016001100、上海近代科学図書館関係雑件 第一巻、H62023001、外務省外交史料館』、前掲『東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流』第六章 在上海日本近代科学図書館」参照）。
- (91) 蔣松輝は、上海日本近代科学図書館総務部長。（『国図』『全支商工名鑑』昭和十八年度（中国通信社、一九四三年）二四七～二四八頁）。
- (92) 下の一字を抹消、判読不能。
- (93) 四部備要は、上海中華書局が一九二七～三〇年に刊行した叢書で陸費逵らの編。経・史・子・集三百五十一種、一万一千余卷。大野城心のふるさと館に『二十四史』のうち、（一）『史記』、（三）『後漢書』、（四）『三国志』、（五）『晋書』、（六）『陳書』・『梁書』・『南齊書』・『宋書』、（七）『魏書』、（八）『周書』・『北齊書』の七冊を蔵する。

- (94) 開明書店（福州路二六八号）は、一九二八年に章錫璋（一八八九～一九六九）が創設した書店。茅盾、巴金らの小説、『六十種曲』、開明青年叢書、国語や英語の教科書その他を出版、販売した。一九五五年に中国青年出版社に合併された。
- (95) 劉復（字半農、一八九一～一九三四）は、江蘇省江陰出身。十五歳から常州府中学堂で学び、母校翰墨林小学校の教

- 員となる。一九二〇年ロンドン大学へ留学後、パリ大学へ移り実験音声学を研究して一九二五年博士号を取得した。帰国後は北京大学教授となり、中央研究院歴史言語研究所研究員、北京輔仁大学教務長を兼任した。雑誌『新青年』の編集を担当、詩文を創作し、『椿姫』なども翻訳した。著書に『揚鞭集』、『半農談影』、『四声新譜』、『方言字典』などがある。一九三四年、方言調査中に回帰熱に罹り急逝した。弟の劉天華（一八九五—一九三二）は、二胡など伝統音楽の発展に貢献した音楽家。筆者が購入した『半農雜文』は、第一冊（北平星雲堂書店、一九三四年六月）と二集（上海良友圖書印刷公司、一九三五年七月）か。ともに大野城心のふるさと館所蔵なし。
- (96) 京華は、福州路にあった広東料理店。前掲『江南の旅』一六、二〇頁参照。
- (97) 府県誌購入にまつわる回想が「論文集のあとに」（『中国文学論考』目加田誠著作集第四卷、龍溪書舎、一九八五年）の中にある（五二二頁）。
- (98) 先施公司（Sincere、南京東路四七九号）は、香港製品を主とする百貨店で、一九一七年開業、四大公司の一つ。建物は現存し、上海時裝公司、東亜飯店、黄浦区文化館などが入居している。
- (99) 神戸商会（北四川路、東亜ホテル前）は、日系の商店。創業者は、大久保直次郎（東亜同文書院第五期生）。前掲『中国工商名鑑 昭和十七年版』六一一頁、『東亜同文書院大学史』四一七頁参照。
- (100) 下の「暫く」二字を抹消。
- (101) 下の「へ」字を抹消。
- (102) 海南線（上海—蘇州—南京）は、華中鐵道会社が運行。鐵道省編纂『時刻表』第十八卷第十一号（東亜旅行社、一九四二年十一月）に拠ると、上海—蘇州間は、八六キロメートル、二等運賃四円九十五銭。上海十二時〇分発、蘇州一四時三一分着。
- (103) 下の「ゆ」字を抹消。
- (104) 皇后飯店は、大井巷東首にあった旅館、前掲『江南の旅』三八頁。上海出発前に小野忍がこの宿を筆者に勧めたという（前掲小野忍「皇后飯店」参照）。
- (105) 蘇州の日系放送局は、一九三九年五月一日、城内北局の大丸蘇州百貨公司の三階に開局した。「6」蘇州放送局「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:B10075007900」 在支滿本邦放送局関係雜件 第一卷（F2-329-001）（外務省外交史料館）参照。中国放送協會（中国名＝中国廣播事業建設協會）は、一九四一年二月設立された日中共同の放送局で、中央

局は南京に、支局は上海、漢口、杭州、蘇州、寧波に置かれた。蘇州局（XGOJ）では、蘇州語、中国語、日本語により放送された。周卓人は蘇州電台長、岩井隆一は副台長。〔国図〕日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和十八年』（日本放送出版協会、一九四三年一月）二九一―二九八頁参照。

(106) 下の「す」字を抹消。

(107) 中日文化協会は、一九四一年七月二十八日、日中国民の文化的融合を目指して南京に創設された。理事長は褚民誼。蘇州分会は、翌年九月十三日に創設された。「中日文化協会成る」〔『読売新聞』一九四〇年七月二十九日朝刊一頁〕、「4. 学会、協会（19）中日文化協会設立 15、8」〔アジア歴史資料センター、RefB5016193900、参考資料関係雑件／宗教、病院、図書館、博覧会、教会関係 第三卷、H73043003、外務省外交史料館〕、杉野元子「南京中日文化協会と張資平」〔『藝文研究』八七号、慶應義塾大学藝文学会、二〇〇四年十二月、二五五―二七七頁〕ほか参照。

(108) 観前街は、蘇州城内の道観（道教寺院）玄妙観の門前街。雜貨店、金銀細工店、飲食店などがあった。玄妙観は、西晋咸寧二（二七六）年創建。前掲『江南の旅』三〇頁ほか参照。

(109) 獅子林は、元の至正二（一三四二）年に臨済宗の天如禪師が弟子とともに蘇州へ移り建立した菩提正宗寺の庭園。その名は、園内にあった假山の姿が獅子の形に似ていたことに由来する。前掲『滿支旅行案内 昭和十七年版』は「その風韻雅趣は世に知られた時もあつたが、現在は俗臭芬々として古趣の佛をとめてゐない」と記す（八四頁）。蘇州四大名園の一つ、二〇〇〇年に世界遺産登録。

(110) 蘇州の陽澄湖は、上海蟹の名産地として知られる。九十月、メスが食べ頃を迎える。

(111) 下の「その内周台長が来て、江蘇図書館長徐徵氏を呼び」二十二字を抹消。

(112) 滄浪亭（東南三元坊）は、蘇州四大名園の一つ。五代十国・呉越王錢氏の姻戚、孫承祐の池館跡という。北宋の慶曆五（一〇四五）年、蘇舜欽（一〇〇八―四八）が朝廷より放逐されて蘇州へ至り、ここを改修し「滄浪亭」と名づけ、滄浪翁と号して「滄浪亭記」を記した。「滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足」〔孟子〕離婁上〕に拠る。蘇舜欽の没後、所有者が変遷し、元代には大雲寺となったが、清の康熙三十五（一六九六）年に江蘇巡撫の宋犖が再建した。乾隆帝は南巡のたびに、この亭の南に行宮を置いて詩を詠んだという。その後荒廃していたが、一九二七年に蘇州美術專科学学校校舎となった。日中戦争開始後、日本軍が接収。二〇〇〇年に世界遺産登録。福本雅一「滄浪亭と蘇舜欽」〔『國學院大學紀要』第三六卷、國學院大学、一九九八年三月、九三―一三一頁〕ほか参照。

- (113) 『江蘇文獻』は、一九四二年二月に江蘇国学社が創刊した学術雑誌。国学社は、江蘇省政府の支持を受け一九三九年に創設された書院で、経義、史論、詞章の三課を立て、通信教育を行った。社長は教育庁秘書の龐独英、主講は曹元弼、詞章担当は陳孟閔。『江蘇文獻』創刊号巻頭に李士群（汪兆銘政權の要人、一九〇五～四三）の「発刊詞」がある。山田厚「大陸文化雑纂 第三」（『斯文』第二三編第十二号、斯文会、一九四一年十二月）一九～二一頁参照。大野城心のふるさと館に『江蘇文獻』第一・二期合刊（一九四二年二月）、第三・四期合刊（同年四月）、第五・六期合刊（同年六月）、第七・八期合刊（同年八月）の四冊がある。管見の限り日本国内の他機関に所蔵なし。
- (114) 下の「覚えさせる」五字を抹消。
- (115) 徐徵は、江蘇省立蘇州圖書館館長。（『国図』上海自然科学研究所編『中国文化情報』第二六号（上海自然科学研究所、一九四〇年十一月）二九頁参照。）
- (116) 陳奐（一七八六～一八六三）は、字は碩甫、号は師竹、江蘇省蘇州生まれ。晩年、蘇州南園に居り、南園老人と号した。二十五歳で江沅に、二十七歳で段玉裁に師事した。嘉慶二十三（一八一八）年、上京して王念孫・引之父子を訪ね、交流が始まった。翌年、胡承珙と面識を得、ともに毛詩研究をすすめた。道光八（一八二八）年に北京を出て遊行、道光十三年頃から杭州の汪遠孫宅に聘せられ、約二十年間学究生活を送る。道光二十九年頃、両江総督陸建瀛に招かれ南京で『爾雅義疏』、『求古録礼説』などを校刊した。咸豐三（一八五三）年、太平天国の乱により南京は陥落し、陳奐は無錫、蘇州へ移った。生涯をかけて完成した『詩毛氏伝疏』三十巻は、清朝考証学の方法を用いた詩経研究の成果と称される。『清史稿』巻四八二に伝がある。筆者は前年「陳碩甫伝」を『文学研究』二九輯に投稿している（四三～六七頁）。
- (117) 欄外に朱墨「○」印あり。
- (118) 段玉裁は「北京旅行日記（一九三六年）」（二）三八頁注五五。
- (119) 俞曲園（俞樾、一八二一～一九〇七）は『北平日記』二二〇頁注三二。さきの留学報告に俞樾の章あり。
- (120) 春在堂は、俞樾旧居の一部、人民路馬医科巷四三三号。俞樾が殿試で「淡烟疏雨落花天」の詩題に「花落春仍在、天時尚艷陽」と詠み、主考官の曾国藩はこれを激賞した。後年俞樾がここに寓居すると、曾国藩は「春在堂」の扁額を贈ったという。高倉正三『蘇州日記』（弘文堂書房、一九四三年）に「曲園は多分そのまま保存され、居室も埃だらけですが面白うございました。春在堂の額や版木がそのままです」とある（昭和十四年十月三日〔高倉克己宛〕、七～八頁）。

(121) 惠棟は、「北京旅行日記（一九三六年）」（二）五二―五三頁注一〇一。

(122) 下の「統」字を抹消。

(123) 留園は、旧市街の西北（姑蘇区）に明・万曆二十一年（一五九三）年、元太僕寺小卿徐泰時が「東園」を創建したことに始まる。その後荒廃したが、清・嘉慶三（一七九八）年、劉恕が改築して寒碧荘と命名した（別称〓劉園）。太平天国の乱により再び荒れ、同治十二（一八七三）年、湖北按察使の盛康（宣懷）が購入して三年かけて大規模改修を行い、「劉園」と同音の「留園」と改めた。敷地面積約一万坪、多種多様な建物と数々の太湖石で知られる。一九三八年八月に訪れた火野葦平は「留園は荒れ果てた廢園である……亡びつつあるものの哀しき美しさがある……聳え立つ樹林の上から、五位鶯はさんさんと白銀の糞尿を落下してきた」などと記した（『蘇州その他 糞尿譚』、『河童昇天』、改造社、一九四〇年、一二八―一二九頁）。日中戦争末期、日本軍が占拠した。戦後修繕が行われ、一九五四年に公開された。北京の頤和園、承德の避暑山莊、蘇州の拙政園とともに四大庭園とされる。一九九七年世界文化遺産登録。

(124) 筆者は、一九三五年三月、小川環樹、赤堀英三とともに蘇州を訪れた。『北平日記』二三五頁注一〇六。

(125) 下の「美し」二字を抹消。

(126) 冠雲台は、留園内にある正方形、三方吹き抜けの亭。

(127) 文頭「こ、も亦」四字を抹消。

(128) 下の「に」字を抹消。

(129) 上の「只」字を抹消。

(130) 下の二字を抹消、判読不能。

(131) 西園（別名戒幢律寺）は、元代至元年間（一二六四―九四）の創建で、もと歸元寺と称した。明代に徐泰時が東園を創設、東園に対し西園と名付けられた。徐泰時の没後、歸元寺に戻る。崇禎八（一六三五）年、改宗し、名を戒幢律寺と改めた。咸豐十一（一八六〇）年に兵火で焼失、光緒年間に再建された。

(132) 下の一字を抹消、判読不能。

(133) 袁殊（一九一―一八七）は原名字易、湖北省蕪春生まれ、著名な「五面相スバイ」。働きながら十二歳で上海立達学園に入学、無政府組織「黒色青年」に所属した。一九二七年国民党北伐軍に参加したが翌年上海に戻った。一九二九―三一年、日本へ留学して新聞学を専攻した。帰国後、上海で『文藝新聞』を創刊するも間もなく廃刊。一九三二年十月、

中国共産党に入党。これを隠して国民党中央執行委員調査統計局（中統）、国民政府軍事委員長沙統計局（軍統）、黄金榮・杜月笙らのマフィア（青幫）、上海総領事館総領事館副領事岩井英一（岩井公館）に属し各所の諜報活動に従事した。日中戦争開始後、日本側組織に奉職したため、漢奸とされたが、一九八二年に名誉回復。小泉清一・馬場毅・三好章「インタビュー 東亜同文書院・岩井公館・潘漢年の思い出——小泉清一氏に聞く」（愛知大学現代中国学会『中国21』第十五号、二〇〇三年三月、二〇五～二二三頁）、関智英「袁殊と興亜建国運動——汪精衛政権成立前後の対日和平陣営の動き」（『東洋学報』第九四卷第一号、東洋文庫、二〇一二年六月、八九～一二九頁）、遠藤誉「毛沢東——日本軍と共謀した男」新潮新書六四二（新潮社、二〇一五年）、馮曉蔚「紅色特工袁殊——『五重間諜』的潜伏傳奇」（『春秋』二〇一二年第三号、中国人民政治協会議山東省委員会弁公庁、二三～二八頁）ほか参照。

(134) 丁丁（一九〇七生）は、本名丁嘉樹、別名丁雨林、丁森。その他の筆名は金馬、林梵など。上海大学文学部卒業。『革命文学論』（泰東書局、一九二六年）により文壇に名を馳せた。東群書店、華美週報などの編輯に携わった。一九四二年十一月、大東亜文学者会議のため来日（役職＝江蘇省教育庁主任秘書）。一九四九年に香港へ移居した。作品に『中国国民党的組織法』（大東書局、一九二八年）、『浪漫的恋愛故事』（現代書局、一九三一年）、『未寄的詩』（群衆図書、一九三五年）、『蹉跎集』（作家出版社、一九四二年）など。丁丁「日本印象記（六）凄烈な精神力／中支代表」（『読売新聞』一九四二年十一月七日朝刊三頁）、『台港澳及海外華人作家詞典』（南京大学出版社、一九九四年）七六頁、徐改平「陳獨秀編著過『革命文學史』嗎」（『中国現代文学研究叢刊』二〇〇九年〇六期、中国現代文学館、一四六～一五一頁）参照。

(135) 下の一字を抹消、判読不能。

(136) 下の「らう」二字を抹消。

(137) 下の「約」字を抹消。

(138) 通称北寺塔は、蘇州駅のすぐ南にある。呉の赤烏年間（二四七～二五〇）、孫権が母の恩に報いるため、通玄寺を築造したことに始まる。唐の開元年間（七一二～七四一）に開元寺と改名、後唐の同光年間（九二三～九二六）に再建された際、報恩寺となる。梁代に十一層の宝塔が建てられたが、その後たびたび壊され、北宋になって九層の塔が再建された。現在の塔は、六層までの塔身が南宋、七層以上は明代、廂と欄干は清代に再建されたもの。高さ七六メートル、九階からは蘇州を一望できる。

(139) 下の「る」字を抹消。

- (140) 下の「が」字を抹消。
- (141) 下の「コーヒー」四字を抹消。
- (142) 下の「に」字を抹消。
- (143) 下の「蘇州南京間二等」八字を抹消。
- (144) 下の二字を抹消、判読不能。
- (145) 『北平日記』一三五頁注一〇六。
- (146) 『江蘇日報』は一九四一年十月十日、『蘇州新報』を引き継ぎ創刊された中国語新聞。当該記事は「見出し」「九州帝大教授蒞蘇觀光 中日文協蘇分會昨邀開 中日文化座談會並歡送理事丁丁赴日考察」、「本文」(「本紙訊」) 日本九州帝國大學名教授目加田誠氏、於昨日來蘇觀光、氏爲日本文學名家、對中國文學、頗有研究、曾於七年前來華遊歷、此番特來清鄉地區考察文藝復興情形、蒞蘇後、由中日文化協會江蘇分會接待、並邀請蘇州文化名流、于下午六時、假百貨公司二樓舉行中日文化座談會、計到目加田誠、黃敬齋、袁殊、余百魯、唐惠民、后大椿、丁丁、汪正禾、史訓遷、林蘇民、徐徵、周卓人、大竹誠、謝渙然、張修明、吳洪烈等二十餘人、對中日文化交流、及東亞文化復興問題、討論頗詳、繼之舉行盛大宴會、理事長袁殊致詞」。閔智英「『江蘇日報』社論目錄(一)」(『明大アジア史論集』第二六号、明治大学東洋史談話会、二〇二二年三月、六三〜七九頁 参照)。
- (147) 下の「新聞記者といふものは日本も支那も同じく心得たものだ。恥しくなる。」三十二字を抹消。
- (148) 首都飯店(中山北路)は、華中鐵道直営の日系旅館。〔国図〕『江南の旅』七二頁参照。
- (149) 下の「漢口」二字を抹消。
- (150) 宝来館(延齡路)は、日系旅館。同左七三頁参照。
- (151) 下の「低く、(壊れたのであらうが)それを」十六字を抹消。
- (152) 下の「同じ町だとは思はれない」十一字を抹消。
- (153) 夫子廟は、秦淮河北岸の貢院街にある。東晋咸康三(二三七)年創建、北宋景祐元(一〇三四)年孔子廟に改築された。南宋・清代の二度、焼失による再建が行われた。筆者の訪問時は、日中戦争により「明倫堂を除くこれらの建物は焼失してしまつた。附近には茶館、映畫館、ダンスホール、商家、妓院等があり、日夜雑沓を極めてゐ」た(前掲〔国図〕『江南の旅』六五頁)。

- (154) 下の一字を抹消、判読不能。
- (155) 上の「出入りする人の盛んな」十字を抹消。
- (156) 画舫は、秦淮河で宴遊を催した色彩豊かな屋形船。
- (157) 古書店は夫子廟付近に集中し、筆者の記す二店は朱雀路あった。日本軍南京侵攻後、接収書の一部が市場に流入していたという。保文堂は、一九三六年以降、状況より移転してきた店で、店主張氏は、河北省衡水の人、アヘン愛用者。ほかに愚直な店員彭氏がいた。翰文書店（翰文齋）の店主錢氏は揚州の人。兄弟四人で営業、叢書を影印して販売していた。徐雁『中国旧書業』（科学出版社、二〇〇五年）二二四～二二八頁参照。
- (158) 『文心雕龍』は、『北平日記』四九頁注一八一。筆者は『文心雕龍』を一九四一、四四年に教材としている。「目加田教授講義題目」（『文学研究』第六五輯、九州大学文学部、一九六八年三月、vi～xii頁）参照。
- (159) 『紅樓夢』は、『北平日記』一三〇頁注三。「王希廉評本」は、『新評繡像紅樓夢全伝』一二〇回、道光十二（一八三二）年刊。王希廉（一八〇五～七七）は、原名は希棣、字は雪香または雪齋、江蘇省蘇州の人。清代『紅樓夢』三代評家の一人。書画詩文に秀で、虞山に寓居して才媛の妾・周綺と風雅を楽しんだという。編に『變史』四十八卷がある。筆者は『紅樓夢』を一九三五、三六年に教材としている（一九四五年）。李永泉「王希廉家世生平補考」（『紅樓夢學學刊』二〇一三年〇二期、中国藝術研究院、一二二～一二三頁）、前掲「目加田教授講義題目」参照。
- (160) 下の「珍しいが」四字を朱墨にて抹消。
- (161) 秣陵村（現南京市江寧区）は、南京市街より南へ約二十五キロメートル。同仁会南京診療班が、一九三九年七月より、南京防疫所より感染症診療を引き継ぎ、分院とした。上海自然科学研究所二代目所長の新城新蔵は、一九三八年八月、南京で調査中に赤痢により急逝している。「第八章 南京診療班」（『同仁会四十年史』、同仁会、一九四三年、三四二～三六六頁）参照。
- (162) 「岩崎大佐」は、支那派遣軍報道部長岩崎春茂。当時南京在勤の報道部員は、上田良作少佐、鷹尾正中尉、石原円彌、石川信雄、河田友英、猪野喜三郎。（『国図』）支那派遣軍報道部編『紙弾』（支那派遣軍報道部、一九四三年、一～六・一七〇～一七一頁）参照。
- (163) 張資平（一八九三～一九五九）は、原名張星儀、広東省梅県の人。家塾、広益中西学堂、高等巡警学堂で学ぶ。一九二二年、日本留学試験に合格。第一高等学校より第五高等学校へ転入した。一九一八年夏、福岡の筥崎宮参道で郭沫若

と再会し、約二ヶ月間、この付近に逗留した。翌年東京帝国大学理学部地質学科に入学、創作活動を始め、一九二一年に郭沫若、郁達夫らとともに創造社を設立した。翌年帰国し、一九二六年武昌第四中山大学教授、一九二八年暨南大学教授となる。旁らで恋愛小説を主に創作を続け、新宇宙書局編集者のほか、楽群書店を主催し『楽群月刊』を創刊、汗血社『国民文学』主編集長をつとめた。日中戦争開戦後は、一九四〇年南京政府農鋳部技師、一九四一年南京中日文化協会『中日文化』編集長となった。戦後は漢奸とされ、編集・翻訳の仕事に従事した。著書に『飛絮』（創造社、一九二六年）、『愛之焦点』（創造社、一九二八年）、『自然地理学』（商務印書館、一九二三年）などがある。松岡純子「張資平『約檀河之水（The Water of Yoldan River）』論」（九州中国学会報）第三〇巻、一九九二年五月、一〇一―一二四頁）、前掲杉野元子「南京中日文化協会と張資平」ほか参照。

(164) 陳大悲（一八八七―一九四四）は、本名陳聰奔、浙江省杭州の人。一九〇八年蘇州の東吳大学に入学、演劇活動を始めた。一九一一年、大学を離れて上海に移り俳優となる。一九一八年日本に渡り、翌年帰国して北京で晨報社職員となる。演劇論や戯曲小説を発表、一九二一年四月より『晨报副刊』に「愛美（『アマチュア』的戯劇）」を連載した。翌年十一月に人藝戯劇専門学校を開校したが一年余で活動は終わった。一九二八年南京国民政府外交科長就任後は官職と演劇界を行き来し、一九四二年中日文化協会湖北分会主任幹事となり武漢で演劇活動を行った。瀬戸宏「陳大悲と人藝戯劇専門学校」（『東方学』第一〇三輯、東方学会、二〇〇二年一月、九八―一二頁）、鈴木直子「陳大悲とアマチュア演劇」（『中国文化 研究と教育』第七〇号、中国文化学会、二〇一二年六月、三九―四六頁）ほか参照。

(165) 陳寥士（一八九八―一九七〇）は、原名は陳道量、別称陳器伯、浙江省寧波出身。同郷の書家沙孟海らとともに馮君木に学ぶ。著書に『七塔寺志』（一九三七年）がある。一九三九年十二月、中国文藝協会常務理事就任。一九四三年當時、国民政府監察院参事、行政院文物保護委員、博物専門委員会顧問、中国作家連盟議會常務幹事、中国詩刊社社長。『国図』上海自然科学研究所編『中国文化情報』第二一号（上海自然科学研究所、一九四〇年一月）二三頁、陳寥士「文学者大会に寄す 出席代表の言葉（五）」／日本国民に寄す／南京代表」（『朝日新聞』一九四三年八月十七日朝刊四頁）参照。

(166) 樊仲雲（一九〇一―一九〇）は、名は琛、字は德懿（又は德一）、筆名は従予等、浙江省峽県甘霖鎮の人。一九二二年商務印書館に入り、『東方雜誌』などの編輯を担当した。上海事変後、教育部より二年間日本へ派遣された。帰国後、南京中央政治学校、復旦大学などで国政政治学を教えた。他方、周仏海らと新生命書局を創設、週刊『社会与教育』の主編

を兼ねた。日中戦争開戦後に香港へ転居したが、一九三九年汪政權の中央執委員となり、一九四〇年七月中央大学校長に就任、その後も複数の要職に就いた。中華人民共和国建国後は再び香港へ移り、国際政治評論家として活動した。樊仲雲「中日和平の路」(『師と友』十二卷三号、全国師友協会、一九六〇年三月、一四一―一七頁)を翻訳した池田篤紀は、樊仲雲について「温厚篤実の君子人で、非常な勉強家である」と紹介している。

- (167) 国立中央大学は、一九〇二年の三江師範学堂創設に始まる。一九二一年に高等師範学校から国立東南大学に昇格、一九二八年国立中央大学となった。一九三七年、南京に日本軍が侵攻すると教員学生の多くは西遷した。一九四〇年四月、汪政權が同名により再開した。

- (168) 麓保孝(一九〇七―一九八八)は、筆者の後輩。『北平日記』九〇頁注四八、同一四三頁注八六。一九四二年九月、日本大使館一等通訳官として南京に赴任していた。『麓保孝教授略歴および研究業績』(『防衛大学校紀要』第二六輯、防衛大学校、一九七三年三月、一―七頁)参照。

- (169) 福昌飯店(中山路五七号または七五号)は、一九三二年開業のホテル。民国建築の代表作の一つとされる。

- (170) 下の「り度い」三字を抹消。

- (171) 下の「い」字を抹消。

- (172) 下の「形はどうであらうとも。」十一字を抹消。欄外に朱墨「〇」印あり。

- (173) 下の一字を抹消、判読不能。

- (174) 顧炎武(一六一三―一六八二)、黄宗羲(一六一〇―一六九五)は、清初の著名な考証学者。

- (175) 国民政府文物保管委員会図書専門委員会所属の図書館。日本軍の南京侵攻後、南京市内より八十数万冊の書が接収され、一九三九年夏、二十五名が二ヶ月がかりで一次分類を終えた。これらの接収図書・宝物等は、南京還都一周年を記念して、一九四一年三月二十六日に中支建設資料整備委員会より汪精衛政權へ返還され、文物保管委員会が整理を継承した。宝物類は、同年七月より後述の博物館で一般公開が始まっていた。金丸裕一「批判と反省 戦時江南図書『掠奪説』誕生の歴史的背景」(『歴史学研究』第七九〇号、續文堂出版、二〇〇四年七月、二五―三二頁)参照。

- (176) 欄外に朱墨「〇」印あり。『国学図書館』は、江蘇省立国学図書館。所在地は龍蟠里。一九五二年、国立南京図書館に併合された。『丁氏八千卷楼』は、清末四大藏書楼の一つで、清末の藏書家丁申(一八二九―一八七)、丁丙(一八三三―一九九)兄弟の藏書楼。丁氏兄弟は、浙江省杭州錢塘の人。豊富な浙江の文献のほか和刻本や朝鮮本なども藏していたが、

丁氏の子孫が事業に失敗、流亡を危惧した両江総督端方（一八六一―一九一一）が七万三千元を投じて買収し、一九〇七年に江南圖書館を設立して収蔵した。前掲高橋智『書誌学のすすめ——中国の愛書文化に学ぶ』三五―三七頁、鳥井克之『南京図書館新館・金陵図書館見聞記』（『関西大学図書館フォーラム』第二〇号、関西大学図書館、二〇一五年六月、一六―二二頁）ほか参照。

(177) 朝天宮は、呉王夫差が佩剣を鍛える冶城を設けたのが始まりで、明の洪武十七（一三八四）年、朝天宮と改称し朝賀の儀式を学ぶ場となった。明末の戦乱で焼失、清初に道観となり改修を重ね発展した。同治五年（一八六六）年に江南府学が移転した。一九二七年以降は裁判所が置かれた。

(178) 檔案は、政権の公文書。檔子ともいう。

(179) 鷄鳴寺は、鷄籠山の東麓、北側は玄武湖に面する古刹。遡源には二説ある。栖玄寺Ⅱ三国呉Ⅱ西晋永康元（三〇〇）年創建を遡源とする説。もう一つは、同泰寺Ⅱ南朝梁普通八（五二七）を遡源とする説。梁武帝のもと隆盛を誇り「南朝第一」と称される。明の洪武十八（一三八七）年勅命により鷄鳴寺が創建され、以後整備がすすめられた。

(180) 国民政府は、中央政治委員会、行政院、立法院、外交部とともに鷄鳴寺の道向かいにあった。

(181) 中華民国中央研究院歴史語言研究所。北京東路一号、所長は傅斯年（一八九六―一九五〇）。一九二八年に広州で創設された。歴史、語言、考古、人類学の四部門。翌年北京、一九三六年に南京へ移った。日中戦争中は、長沙、昆明、四川省南溪県李莊を転々とし、一九四六年南京へ戻り、一九四八年台湾へ移った。現在跡地には、中国科学院南京地質古生物研究所がある。

(182) 趙元任（一八九二―一九八二）は、字は宣重、原籍は常州、天津生まれ。中国現代言語学の父。一九〇七年、南京の江南高等学堂に入學、一九一〇年清華学堂奨学金によりアメリカへ留學し、コーネル大学・大学院、ハーバード大学院で学ぶ。一九二〇年帰国。清華大学で数学、物理学、中国音韻学、普通語言学、静養音楽などを担当した。一九二八年より歴史語言研究所研究員として各地の方言調査に赴く。一九三八年ハワイへ、その後アメリカ本土へ移住、エール大学、ハーバード大学などで教鞭を執る。一九五四年にアメリカ国籍取得。一九六〇年、アメリカ東洋学会会長。著書に『現代吳語的研究』（清華学校研究院、一九二八年）、『Language and Symbolic Systems』（Cambridge University Press、一九六八年）など、橋本萬太郎訳『言語学入門——言語と記号システム』（岩波書店、一九八〇年）、共著『湖北方言調查報告』（商務印書館、一九四八年）など。「教我如何不想他」を作曲（作詞劉半農）。小川環樹「趙元任先生の追憶」

〔談往閑語〕、筑摩書房、一九八七年、一七一―一八二頁）ほか参照。

(183) 『北平日記』二三五頁注一〇六、一九三五年三月九日。

(184) 前述の歴史語言研究所と国立故宮博物院南京分院の所蔵品を指す。国立故宮博物院（一九二五年十月十日創設）は、満洲事変後、日本軍から保護するため、一九三三年上海へ移送、さらに一九三六年十二月南京へ運ばれ、翌年一月南京分院を開設して保管した。間もなく日中戦争が始まり、その一部は歴史語言研究所所蔵品とともに各地を転々とし、四川省巴県などに保管された。筆者が観覧したのは、残されていた文物と思われる。松金公正「台北故宮と『中華』との距離——建院七〇周年」と『建院八〇周年』との間の連続性と非連続性（沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』日本貿易振興機構アジア経済研究所、二〇一二年、二〇九―二五〇頁）、〔台湾〕国立故宮博物院公式ウェブサイト「故宮院史」（URL = <https://www.npm.gov.tw/Articles.aspx?no=03012532&=1>、最終確認日＝二〇一三年四月七日）ほか参照。

(185) 下の「見」字を抹消。

(186) 「広運之宝」は、勅諭、勅書の末尾に押される玉璽。明代の初めに定められた十七宝璽の一つで、明内廷で用いられた。『明史』輿服志四、職官志三尚宝司ほか参照。ノートは四字目を「印」と記す。

(187) 下の一字を抹消、判読不能。

(188) この日は、旧暦九月十五日、満月。前出の早稲田大学會津八一記念博物館松枝茂夫文庫に、当日付の松枝茂夫宛絵葉書がある。上海、蘇州訪問の様子と今後の予定などを記す（発信元住所＝南京、軍事郵便、目録番号五二〇）。

(189) 魯迅『阿Q正伝』の劇作本は複数刊行されていた。陳夢韻編『阿Q劇本』（華通書局、一九三二年）六幕、田漢編『阿Q正伝』（戯劇時代出版社、一九三七年）五幕、許幸之編『阿Q正伝』（光明書局、一九四〇年）六幕。田漢編は宮越健太郎訳（文求堂、一九四一年）がある。大野城心のふるさと館所蔵なし。

(190) 「前門」は、「大前門」か。一九一六年に外資系の英美煙公司より発売された。一九四九年国営化され、商品名を継承、現在も大前門集団より販売中。「スリーキャッスル」は、「三炮台（The Three Castle）」、英美煙公司の高級ブランド。軍幹部にも愛好されたという。

(191) 中山碼頭を指すか。日本軍に接收され、安宅棧橋と改称されていた。碼頭（中 mǎ tóu）埠頭、波止場。

(192) 長江航路（上海―漢口）は、日中戦争開始に伴い激減して殆ど日本船となった。日本の運営会社は、その他の航路と

ともに一九三九年八月創設の国策会社、東亜海運株式会社に一本化されていた。『日清汽船株式会社三十年史及追補』、日清汽船株式会社、一九四一年）一九三二〇〇頁、〔国図〕『支那の航運』（東亜海運、一九四三年十月）一〇〇～一〇二・一四二～一四四頁ほか参照。

(193) 下の一字を抹消、判読不能。

(194) 紫金山は、南京市東部にある。標高四四八・九メートル。旧名は鍾山、蔣山。山麓に中山陵、明孝陵、靈谷寺などがある。

(195) 安徽省蕪湖市。

(196) 下の「五時半」三字を抹消。

(197) 下の「江上には霧まよひ」八字を抹消。

(198) 下の「出て」二字を朱筆にて抹消、「残つて」加筆。

(199) 鳧はマガモ、鷺はカモメ科の水鳥。『詩経』大雅、生民之仕に鳧鷖篇がある。

(200) 下の「滔」字を抹消。

(201) 現在の安徽省安慶市。

(202) 下の「ので残念だ」五字を抹消。

(203) 欄外に朱墨「○」印あり。

(204) 下の「くのぼつた」五字を朱墨にて抹消。

(205) 下の「美しく」三字を抹消。

(206) 次行の一文「右に彭沢と思はれるあたり、山々の起伏が美しい。」二十三字を抹消。

(207) 下の「江上に」三字を抹消。

(208) 左の「するあり」四字を抹消。

(209) 下の「が」字を抹消。

(210) 左の「山」字を抹消。

(211) 下の「ある」二字を抹消。

(212) 下の「非常にすぐれてゐる。」十字を抹消。

(213) 小孤山とも記す。安徽省安慶市宿松県の南東約六〇キロメートル、長江河畔に聳える小さな山。

(214) 江西省九江市彭澤県。

(215) 下の「から」二字を抹消。

(216) 下の一字を抹消、判読不能。

(217) 廬山は、九江市南方の名山。山峰には漢陽峰、香炉峰、五老峰などがあり、最高峰の漢陽峰は標高一四七四メートル。

(218) 下の「してくる」四字を抹消。

(219) 鄱陽湖は、廬山の東側、長江南岸にある中国最大の淡水湖。平時の面積は、三一五〇平方キロメートルだが、減水期と増水期により大きく変動する。

(220) 下の「■ちしい」四字を抹消。

(221) 下の「なのでをどろいた。」九字を抹消。

(222) 下の「あまり」三字を抹消。

(223) 上の「軍」字、下の一字（判読不能）を抹消。

(224) 義五郎、千鶴子は、筆者の弟妹。

(225) 能仁寺は、もと承天院と呼ばれ、梁武帝時代の創建。北宋の仁宗（在位一〇二二～一〇六三）のとき、白雲端禪師により再興された。元の至正十二（一三五二）年に焼失したが、明の洪武十二（一三七九）年に修復され、弘治五（一四九二）年に能仁寺と改称した。大勝塔もこのときの創建、同治九（一八七〇）年に修復された。六角七重、高さ約四十二メートル。当時、寺内は荒廃し、塔のみ屹立していた。〔国図〕常盤大定・関野貞『支那文化史跡 解説』第十卷（法蔵館、一九四〇年）七〇～七一頁ほか参照。

※本研究は、JSPS 科研費「P20K12947」の助成を受けたものです。